

逆行しても俺の未来はメルヘン冷蔵庫

ハマグリ一派

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

垣根帝督がもし逆行したら

目次

1話	ていとくさん@がんばらない	1
2話	Re:ゼロから始める異能力生活	6
3話	やらなければいけないことなら手短に	15
4話	今日だけ本気出す	23
5話	計画通り	31
6話	嘗て闇に堕ちた英雄	38
7話	黒幕たち	47
8話	心理定規の追憶	51
9話	新歓コンパとは	62
10話	猫虎ちゃんには友達はいない	70
11話	ていとくんは今日も気だるげ	76

1話 ていとくさん@がんばらない

俺の名前は垣根帝督。

学園都市第二位の超能力者だ。能力はこの世には存在しない素粒子を操る未元物質^{ダークマター}。

まだ発見されていないだとか、俗に言う暗黒物質とかでもない。本当にこの世には存在しない物質を操る能力。

羽毛のようにしなやかな形状にも鋼のように強靱な形状にすることも、俺の思いのままに変化することができる、あらゆる用途で活用できる生産力の極地の力。

そして、俺の優れているところは超能力だけじゃない。

まず、権力。学園都市第二位の能力者であることが、既にブランド価値を秘めている。能力研究の謝礼金で莫大な金はもちろん。能力開発施設の優遇なんかもそうだ。

さらに、俺はビジュアルも秀でている。長身の背丈に精巧な顔付き。その気になれば女を侍らすこともできる。

そんな超能力、権力、金、力、顔、全てのステータスがそこの凡人を遥かに上回るこの俺は現在。

やる気を失っていた。

「あー、めんどくせえ……。このまま永遠に1ミリも動きたくねえ」

あの垣根帝督とは思えない発言を、活力を一切感じられない目と声で彼はしていた。見てくれはホストのような印象を受けるが、その姿を見れば残業終わりのサラリーマンにしか見えないだろう。

ソファアに身体を預けて全力で脱力していた彼に向かって、頭上からどこか色気を感じさせる声が降ってきた。

「何馬鹿なことを言っているのかしら？ いいから、あなたは赤味噌とバルサミコソースを買ってきて」

そう言ったのは、スマホを弄っている心理定規^{メジャー}だ。金髪の巻き毛を後ろで結び派手なドレスを着ている少女であり、通り名と同じ能力で

ある心理定規メジャーハートという、人との心の距離を自在に変えることができる凶悪な能力の持ち主だ。

そんな彼女を初めて見た者が抱く第一印象は、その風貌からホステスか何かにはしか見えないだろう。

その様子から先ほど述べた、調味料などを口にするようにはとても見えないと思うが、彼らにとっては既に見慣れた光景だった。

「相変わらず対極な物を食卓に並べようとしていますね。いや、めっちゃくちゃ美味しいんすけどね」

「うん、心理定規メジャーハートの料理はおいしい」

「ふふつ、ありがと。それじゃあ特別に一品追加してあげるわ。——
ねえ、追加で豆板醤もよろしく」

「和と洋に、さらに中までっ!?ワールドワイドな食卓すぎませんか!?!」

そんな風に声を荒げたのは誉望よぼう万化ばんか。この中で数少ない常識人枠だ。彼はどちらかと言うと物静かな部類の人間だが、この特殊な人間たちに囲まれる中で、自然とこのポジションに着いてしまった。

「グローバル化は大事でしょ?あなたもそう思うわよね」

「うん、とつても大事」

「……いや、ゆずりは 杠は飯食いたいだけだろ」

「はあー、これだから妖怪シヤンプーハット——じゃなかった、誉望よぼう先輩は女の子にモテないんですよ。女の子と話すときにはもつと共感した態度取らないと嫌われるに決まっているじゃないですか。こんな常識ですよ常識」

「黙れボツチ」

「テメエやんのかあ” あん?!”」

逆鱗らっこんをピンポイントで踏まれ、誉望よぼうにメンチ切っているのは弓箭ゆみや狛虎らっここ。暗部くらふで誉望よぼうに教育を受けている彼の後輩だ。

先輩に直接ぶち切れるなど表でも裏でもまずあり得ないが、それでも誉望よぼうはそしらぬ顔で流した。これも今の垣根と会った影響か。

「っーか、特に何かある訳じゃねえのによく集まるな。どうした暇なのかお前ら」

「何よ。こうして自堕落に陥っているあなたのために、ご飯を作り」

来ているでしょ？私は感謝されたいくらいだわ」

「うん、垣根に感謝されたい」

「別に来いだなんて言ってるねえし、あと林檎に關しちや俺がお前を居候させてんだろうが」

「俺らも仕事終わらせて来てるんで今日はもうオフス。なのでゆずりは 杠にお土産とか買ってきたんで、寄らせてもらいました。あつ、コイツは言わなくても分かると思いますけど、放課後一緒にどっか行く友達いないんで」

「それ以上ボツチだのなんだの事実無根なことで弄るなら、私の黄金の左足が火を吹きますよ瞳孔開きっぱ」

すると、今の会話を聞いたゆずりは 杠が小首を傾げてよぼう 誉望に尋ねる

「……よぼう 誉望は、妖怪シャンプーハット？」

「ぶふうっ!!」

その言葉を聞いてゆみや 弓箭が思わずと言った様子で吹いた。彼女はツボに入ったのか腹に腕を回し身体を曲げて爆笑している。それを見たよぼう 誉望が苛立ち混じりに彼女の頭を叩いた。

このとき、彼らには見えなかったようだが、垣根は派手なドレスを身に纏った彼女が、顔を逸らしながら肩を揺らしていたことに気付く。彼女にも受けはよかったようだ。

眉根に皺が寄っていたよぼう 誉望は意識的にそれを直し、ゆずりは 杠の目線に合うように膝を曲げて、言い聞かせるように話し出した。

「ゆずりは 杠、こっちのアホは『万年ボツチ』っていう特殊生物なんだ。友達が誰一人できない可哀想な奴なんだよ。近寄ったら仲間にされるぞ？」
「おいコラ。いたいけな女の子に何ふぎけたこと言ってるやがりますか。この美少女であるらっこ 狛虎ちゃんがボツチとかどう考えてもありませんよ。断じて私がボツチとかではなくこれは私の置かれた環境がないでしょう？」

暗部のお仕事とかで遊ぶ時間が取れないことや、私が在学している学校はお嬢様学校なので、放課後に出掛ける方が少数派です。つまり、そもそもそう言った状況になりにくいというだけの話でしかないんですよ。断じて私がボツチとかではなくこれは私の置かれた環境がそうさせ

「美少女（笑）」

「殺す。絶対に殺す」

そこから二人の取っ組み合いが始まった。林檎を心理定規が回収し、なるべく遠くに離す。3分ほど経つと誉望よぼうの念動力サイコキネシスで、身動きができなくなったにも関わらず、未だに罵声を浴びせるボツチがそこにいた。

そんな前回では考えられないほどに賑やかな空間が目の前に出来上がっていた。規律があるかないかで言えば無いだろうし、上下の関係があるかと言えばそれも無いだろう。

それこそ、プライドが高く俺様上等な垣根帝督ならばここで、威圧の一つや二つはかけるのが自然だ。

そして、彼はこの光景を見て思った。

「まあ、いいかどうでも。めんどいし……」

彼はそう考えさらに身体を沈める。彼の定位置はここである。自分に王座などはいらない。必要なのはこの低反発なソファーだけだと本気で思っている。

権力？殺し合い？自分に関係ないところで勝手にやってろ。そんなことを思いながら怠惰に過ごす日々。その姿を見れば本当に学園都市第二位なのか疑わしくなってくるはずだ。

しかし、遺伝子から何まで全く一緒の彼は間違はなく垣根帝督である。彼の人格の根つこの部分は変わってはいないし、別の人格が彼の身体に宿るような自滅はまだしていない。

彼は真正正銘、ここまで未元物質ダークマターを成長させてきた垣根帝督なのだ。それなのにどうして彼はこんなにも無気力なのか。

「(そもそもこんなことにならなければ、俺がこんな感情を持つこともなかったのか……?)」

彼は過去に思い馳せる。この現象の始まりと、自らを取り巻くこの賑やかな空間がどうして出来上がったのか。

それは自分自身の変化の原因にして、周囲が変化した全ての原因そのものであった。

彼の類いまれなる優秀な頭脳を持ってしても、原因を未だに完璧には理解できない現象。

つまり、

「タイムリープとかしても暇な時間ばつとかか、割りと拷問に近いんじゃないのこれ？……あー、マジでダルい」

2話 Re:ゼロから始める異能力生活

とある廃墟に彼らは訪れていた。かつてはマンションかなにかだったのだろうが、今では使われておらず電気や水道が止まっていることはもちろん、壁などが崩れてしまっている始末だ。

そんな廃墟に複数の少年たちがぞろぞろと入ってくる。彼らが欲しがるような物はなに一つあるはずがないのだが、彼らは目的のものが見付かったような表情をしていた。

それもそのはず、彼らが求めていたのは目の前にいる一人の少女なのだ。

「コイツが依頼のガキか？」

そう言ったのは高校生ぐらいの少年だ。

彼の周りには同じような雰囲気ススキルアウトの少年たちが側にいる。彼らはこの街で無能力者集団と呼ばれているチンピラたちだ。

そんな彼らは一人の女の子を取り囲んで、得意気な表情をしていた。

「なんでも珍しい能力だとかで、こいつ使ってなんかの実験するらしいな」

「低能力者の能力なんざ実験して、なんの意味があんだか」

「頭のいい科学者様の考えてることなんざ、俺たちに分かるわけねえだろ。さっさとコイツ連れてくぞ」

彼らの役目は少女の回収。達成すれば大きな依頼料が手に入る手筈となっている。少年たちからすれば少女は金のなる獲物でしかない。

依頼を達成するために金髪の少年が少女の細腕を掴むと同時に、後ろからよく通る気だるげな声音が届いた。

「……めんどくせえな。さすがに偶然ってわけでもないよな？これも俺が通らねえといけねえ通過点ってわけか？」

「「ッ?」」

バツ！と勢いよく彼らは振り返る。彼らの表情は動揺や疑問で彩られていた。

それもそのはず、この表には見張りも用意し、万全の状態で少女の確保に臨んでいる。そのため、なんの物音一つ出さずにここへ入ってくる者など不可能であるはずだ。

しかし、そこには確かに人影があつた。その人物は場違いにもどこかやさぐれた様子で頭を掻きながら話し出す。

「あー、そういや、時期もこちら辺だったか。……適当に入ったつもりだったんだが、もしかしたら無意識に記憶を辿つちまったか？」

俺の中にある未練がこの場に足を運ばせた……か。ハッ、くだらねえ。それさえも馬鹿馬鹿しい」

その人物は崩れた瓦礫に腰を置いて、どこか投げやりな様子だった。見た目がホストのような男のため、その態度が余計に浮いている。

「な、なんだお前ツ!?いつからそこに居やがった!?この廃墟の出入口には見張りが居たはずだ!」

「そんなもん俺ならどうとでもなんだよ。一瞬あれば事足りる。だが、まあ安心しろよ。」

もともと俺は一階上の部屋で寝ていただけだ。その見張りの奴には何もしちやいねえどころか、会つてすらいねえよ」

「寝ていたって……こんな廃墟でか!」

「ほー、つまり金がなくて不法侵入したつうことか」

「馬鹿が。別にホームレスってわけじゃねえよ。それこそ高級ホテルに毎日宿泊できるだけの金ならある。ただアジトに戻るのがめんどくせえから時間を潰してただけだ。」

……そこでお前らがぎゃーぎゃー騒ぐから、おちおち寝ることもできずに、こうして仕方なく下まで来てやつたんだよ。足を運んでやつた俺に平身低頭で感謝しろ」

「は、はあ?……なに言ってるんだコイツ……」

廃墟で寝ているような変人が急に俺様ムーブをしてきて、武装無能力集団の面々はたじたじだ。何故こんなにもこの男は堂々

としているのだろうか。

そんな中で少年たちのリーダーのような話し出す。

「その話が本当か嘘かはわかんねえが、バレちまった以上ただで帰すにはいかねえな」

そう言うと同時に彼らは懐から刃物を取り出した。この状況は想定外のはずだがその躊躇の無さから、彼らにとって刃物を使うことに一切の躊躇いはないほどに慣れたものなのだろう。

「……はあ、本当にめんどくせえな。だがまあ、暇潰しぐらいにはなるか」

そう言うと彼は自らの能力を解放し、バサツ！と、純白の翼が背中から生まれた。三対になるように広がったその現実味のない光景に少年たちは呆然とする。思わずと言った調子で無能力者集団が呟いた。

「つ、翼……？？」

「な、なんだそりやあ……？これも能力か？」

「お前ら程度じゃあ百年かかってても、一割ですら理解できるもんじゃねえよ。俺の未元物質はな」

その言葉に少年たちは激震が走る。

「お、おいッ！未元物質つーと、まさかコイツはッ!？」

その反応を見て、どこか辟易としながらその少年は名乗り上げた。

「学園都市第二位の超能力者垣根帝督だ。……めんどくせえから一撃で倒されてろ」



俺が再び表層に出てくれば何故か子供時代に戻っていた。この俺

の頭脳を持ってしても微塵も理解できない。

だが、どうやらこのおかしな状況は本物のようだ。科学者共が脳内の電気信号を操作して見せている幻覚でもないらしい。

そして、この状況を理解するため思考を回している途中で、おかしな物が記憶として残っていることに気が付く。

「(どうして俺の中に俺の身体を乗っ取ったあのクソ野郎の記憶がありやがる?)」

垣根の記憶には垣根の身体を奪い去り、自分の存在を塗り潰した存在の歩んだ道のりが残っていたのだ。

子供の世話に生きる喜びを感じる垣根帝督など、吐き気がすることこの上ないが、これも状況を理解するための大事なピース。それも含めて計算するとある事実が浮かび上がった。

「(もし、アイツの記憶にある魔術だかなんだかで、過去に巻き戻ったとすりゃあ、一応全てに説明がつくか)」

生前、今の垣根帝督に魔術の知識は全く無いが、後の垣根帝督は魔術のことは知っていた。科学と魔術の境界線が曖昧なものになったのだから、それも当然の帰結だ。

その馬鹿げた可能性があるならば仮説を立てることはできる。

「(俺は脳から心臓までの全ての身体の構造を、未元物質へと代替した。)

身体を未元物質のみで形作っていた俺の存在は、俺の能力である未元物質そのものと同義だ。

つまり、脳まで未元物質へと変質させた『垣根帝督』の記憶の全ては、能力である未元物質そのものに記憶されてるんじゃないのか？

本来なら本体である俺から主導権を奪い去った以上、俺の人格は消え去るのが道理であり、奴の記憶があるなんてことには方に一つもありえねえ。

だが、子供に戻ると同時に俺が歩んだ記憶と、未元物質そのものが過去に戻ってきたとするなら、未元物質に記録された奴の記憶があっても不思議じゃねえ)」

本来なら考えるまでもなく、あり得ない想定だっただろう。しか

し、垣根の記憶には確かに魔術の存在があったのである。

そして、彼はその馬鹿げた事柄を他のどの能力者よりも早く受け止める。

それができたのは彼には未元物質ダークマターという、この世には存在しない物質を扱っている能力者であったからだ。物理法則ではあり得ないはずのフィルターを受け入れる下地が他の能力者とは違い、彼には既に備わっていた。

彼の頭脳はその仮説にさらなる肉付けをしていく。

「(例え、俺の人格そのものが消えても奴の未元物質ダークマターと、俺の未元物質ダークマターは全く同種の同じものである事実は変わらない。こうして俺の下に奴が使っていた未元物質ダークマターが記憶とともに、世界を遡さかのぼってきても不思議じゃないわけだ)」

タイムリープなのかは知らないが、こうなっている以上は科学よりはオカルトの方が可能性としては高いだろう。

とはいえ、なんの因果かこうしてやり直す機会を手に入れた。ならば、有効活用するのは当然のことだ。

垣根はこれからのことをシミュレートしながら、最善手を考える。

「(アレイスターは最後には破滅することは記憶からわかる。なら、そのときに学園都市を掌握すれば俺の野望は叶ったも同然。俺がすべきは第一位をぶつ潰すことだけだ。

そのためには暗部での地位や力はもちろん、奴をぶつ潰すために能力を早く成長させ……………ん？能力の成長？)」

あらゆる可能性を算出していくとあることに気づく。能力の成長。彼はその到達点がどういふものかを知っていた。

「(ち、ちよちよちよちよつと待てつ……………第一位を倒すには通常の未元物質ダークマターの使い方じゃ話になんねえのは確かだ。あの無限の可能性にまで行き着かなきゃ、押しきることなんざ不可能。

そして、白カブトムシに精神の主導権を奪われないよう、万全の状態で望んでぶつ殺したとしても、どうしても無くならねえ問題がある。——あの化け物女だ)」

西洋のお伽噺に出てくるような魔女の帽子と、水着のような物にマ

ントを羽織った埜外の怪物。あのとときの記憶も垣根は当然持ち合わせていた。

「未元物質データマターの無限の可能性まで行き着いた俺を、ああも簡単に片手で制しやがった化け物。」

当然あの状態になれば目を付けられるに決まっている。そうならば俺が辿る道は破滅だけだ)」

どんなに計算してもあれには勝てないと結果が出てしまう。それほどの化け物だった。あの第一位が遥かに見劣りしてしまうほどに。

そして、懸念事項は学園都市の外だけではなかった。

「学園都市での俺の価値は学園都市第二位の『垣根帝督』じゃなくて、学園都市第二位の『未元物質』にある。つまり、俺じゃなくてあの白カブトムシでもいいってことだ。」

実際にアレイスターの奴はそれで良しにしていたみたいだからな)」

険しい顔をしながら、垣根はその事実を噛み締める。

「俺の身体は未元物質データマターそのものに代替しちまったから、第一位みたく脳ミソに電極ぶつ刺そうがなんだろうが、電磁パルスそのものが変質しているから効くわけがない。」

が、それも既存の話でしかねえ)」

学園都市の闇に身を置いてきた垣根は、この街の悍ましさをよく知っている。

「あの状態の俺には普通の人間に流れている電気信号とは違った、未元物質データマター特有のものが流れちゃいるが、逆に言えばその電磁パルス自体を解析されちゃあどうしようもない。」

木原唯一は俺が産み落とした未元物質データマターを、改造して自分の手足のように使っていたみたいだしな。解析される可能性もゼロじゃない)」

そうなれば自分は未元物質データマターを吐き出すだけの、マシンへと変えられるだろう。そうなってしまえば自分の未来は冷蔵庫しかない。

以上のことから、垣根は一つの結論に達した。

あれ？これってどうやっても無理じゃね？と。

そして、今まで考えていた策略や私情が叶わないという事実が、

さつきまで見えていなかった一つの答えを浮かび上がらせた。

これまでの思考がまるで無意味だったかのようなシンプルな理屈。

最初に一方通行を殺そうとした理由はなんだったのか。それを思い返せば当然のように出てくる疑問だった。

「(っ)か、そもそも俺に第一候補メインプランになる必要があるのか？」

考えてみればそういう結論になるのは必定である。

「俺の野望はアレイスターと交渉することじゃなく、『学園都市統括理事長』に対しての直接交渉権だ。別にそれが統括理事長であるならアレイスターである必要はねえ。

そして、第一位の野郎はどうやらアレイスターのやり方とは違ったやり方をしていたらしい。なら、俺がすべきことは全てが終わったあとに奴へコンタクトを取れば済むんじゃないの？」

一方通行アクセラレータには殺意も憎悪もある。しかし、その部分を見捨てれば自分の長年の宿願が叶うのもまた事実であった。

アレイスターに喧嘩を売るだとか、未元物質ダークマターの極地へと至った自分を片手で掴んだあの化け物女の対策など、無駄でしかないではないか。

それに気づいたとき彼はどうなったか。

「なんだそりや、馬鹿馬鹿しい。結局はそのときまで待てばいい話じゃねえか。……………あー、かったりい」

彼からやる気の三文字が消失した。



「それで？あの子は誰？一体何があったのかしら？」

そして、現在。

俺の前には腕を組んで仏頂面の少女がいた。派手なドレスと華や

かな顔付きからホステスのような印象を受けるが、彼女が醸し出すミステリアスさや上品さから彼女の思慮深さを察することができる。

そんな彼女の能力にして通り名は心理定規^{メジャーハート}。他人との心の距離を自由に操作できる恐ろしい能力者にして、俺がリーダーをしていた組織にいた構成員の一人だ。

そんなかつての仲間の一人だった彼女のことは、俺もどんな人間であつたのか当然知っている。

もちろん全てを知っているなどと言えるような仲でも無いが、俺が彼女に抱いていたイメーヅは、飄々とした態度をしながらも絶対に自分の価値を落とさない強かな女、だ。

それがどうだ？

その彼女から信じられないようなプレッシャーが出ていた。彼女を何がそんなに突き動かしているのかはわからないが、めんどくさい状態になってしまったのはわかった。

俺はそれを見ながらかつたるように声を出す。

「だから言つてんだろ。廃墟に居たから拾つたつてよ」

「垣根さんそれ余計に問題です」

そう答えたのは誉望^{よぼうばんか}万化。頭にシャンプーハットのような機械を装着して能力を発動する念動力者だ。

俺たち三人はシツクな椅子や机が置かれた広い空間の中で談笑していた。というよりも、俺が一方的に問い詰められていた。

「あなたが来ないせいで暗部の仕事がなかった私のオフが、無意味に終わってしまったわ。埋め合わせの一つでもないのかしら？」

「馬鹿か。誰がそんな約束したんだよ。どうせ荷物持ちさせながら俺に金払わせる気だつたらこのキャバ嬢が」

前世ではビジネスライクの関係性でしかなかったが、何故かこの世界の心理定規^{メジャーハート}はやたらと俺に絡みたがる。

何か企みがあるかもしれないと警戒はしているのだが、さっぱり意図が読めない。前回は読めた試しはないが今回に限っては意味が不明だ。

その理解不能な女は細い指を口許に添えて、伏し目がちに呟く。

「あら？そう言った依頼は受けてないしやる必要もないわ。あなただけの特別よ♡」

「ふざけんな」

「まあ、それはそれでいいとして——あの子は誰？」

また、話が戻った。

別に話を流そうとしたわけではないが、めんどくさい展開になったと俺は思う。何が彼女をそんなにも掻き立てているのだろうか？垣根はもう自分にはないそんな熱量を持つ彼女にため息を吐く。

最初は幸運だと思った現象が無意味で価値などほぼ消失したものだど気付き、それから灰色とも呼べるつまらなくめんどくさい日々。

適当に過ごしていたはずが何故か前回の知り合いと再び出会い、以前よりもカロリーを使う間柄となった。彼はこれからの自らの人生と周囲の人間関係を思い返して、いつものあの言葉を呟いた。

「はあ……、めんどくせえ」

3話 やらなければいけないことなら手短に

「ねえ、買っておいって頼んだ醤油はどこかしら?」

「……棚の中」

そう、なんて言いながら心理定規メジャーは棚から醤油を取り出し、鍋に付け足していく。それを見て呆れた。

「なんで飯作ってんだお前」

「その子のご飯食べたいつて言ったからよ。なら、作ってあげるのは当然でしょ?」

「お前の言う当然が俺にはわからねえよ……」

前回のコイツは飯なんか作るキャラではなかったはずだ。いくらなんでも変わりすぎではないか?

「つーか、なんで割烹着なんて着てるんだ?まさかそれ自前か?」

「当然でしょ?最初は物の試しだったんだけど、なんかエプロンよりこつちの方が気が引き締まるのよ。それに如何にも家庭的な女って感じがしてギャップを感じるでしょ?」

「確かに、和洋の濃いところを掛け合わせたギャップが凄まじいな」

和の割烹着に洋の派手なドレスなど、個性のぶつかり合いもいいところである。

スプーンに手を添えながら味見する姿は、その整った造形もあつて様になってはいるが、如何せんその服装の個性が突出し過ぎていた。

「心理定規メジャーさんの料理は美味しいですからすごく楽しみっス」

「……そうなの?」

「ああ、お世辞抜きで本当に美味しいぞ。垣根さんが羨ましいですよあんな綺麗な人に通い妻してもらってるんですから」

「頼んじやいねえよ」

「……垣根通い妻して欲しい?」

「聞いてたか?俺は一度も頼んじやいねえって言ってたんだろ」

そんなピントがずれたことを言っているのは、廃墟で拾ってきた中学生らしき少女、ゆずりは 杠 林檎。

キャミソールにジャージという、こちらもよくわからない格好をし

ている。

このアジトに連れてくるまで爆睡していたが、目を覚ますと腹が空いたと言います。こうして食卓に着いて俺たちと一緒に食事の完成を待っている。

彼女は心理定規メジャーハートに寝癢を直してもらったボブカットを、首を傾げると同時に揺らしながら、眠たげな目をしてこちらを見てくる。

……今の会話で首を傾げる要素なんてあったか？

いや、そんなことよりもコイツらには言わなくてはならないことがあった。

「つーか、お前ら俺と違って暗部だろうが。こんなところにいるのかよ」

そう、今の俺は暗部じゃない。ある程度情報を知っている俺が情報収集など無駄でしかないし、わざわざ学園都市の闇に縛られる必要はない。

権力などは表の奴らと交流を持てばいいだけだ。学園都市二位なら何もなくても勝手に寄ってくる。そして、そいつらと恙無く会話する社交性はあった。

コイツらと出会ったのは当然だが暗部関係の理由ではない。普通に表で生きていたら偶然や必然の巡り合わせでこうして顔を会わせることになった。

「別にいいんじゃないっすか？別に暗部の人間が表の人間と付き合い合っちゃいけないなんてルールはないですしね」

「それに今さらじゃない？ここ私たちの集合場所でしょ？」

それを聞いた彼は深くため息を吐いた。彼自身もその事を否定できなかつたからだ。

ここより前に俺は『スクール』のときのような密談とは違った理由で、隠し家を持っていた。

単純に一人だけのパーソナルスペースが欲しかったために、俺はそこを憩いの場所としていたが、この二人の登場でそれは一変する。

『このキッチン狭くない？』

『あん？そんなもん大して広さ要らねえだろ』

『あなたも料理するならもう少し欲しいじゃない?』

『……もしかして俺とお前が一緒に作る想定してんの?その想定意味あるか?』

『あるわよ。それに大は小を兼ねるとも言うし。大きいに越したことはないわ。あなたもそう思うわよね?』

『え?いや自分は特に——』

『ね?』

『ハイ、ソウツスネ』

『……おい、よぼう誉望。お前どうした?いくらなんでもコイツの言いなりにもほどがあるだろうが』

『まあ、ちよつと以前にお話ししてね。昔話や色々なことを聞かせてもらったわ』

『ちよつと待て。お前それ能力使って——』

『さあ、来月には新居に移りましょうか。まずは物件探しね』

『おい、ここの家主はこの俺だからな?』

そんなこんなで物件を探す羽目になり、こうして新しく別の隠れ家に住みかを移した。そして、憎らしいのが以前の場所よりも快適であったことだ。

そんな経緯があつたためか、この隠れ家で一番の発言力があるのは彼女である。

「まあ、それはともかく、……いや、放っておくのもどうかとは思いますが。それよりもコイツだ)」

ぼけく、としているゆずりは杠林檎を見る。彼女とは前世でただの他人ではなかった。俺にとって苦い記憶の一つだ。

「(前は一方通行の演算パターンを知るという理由があつたが、今回は別にそれは欲してねえ。俺にとって得があるか無いかと言えば微塵も無いわけだ)」

冷静にそう判断する。つまり彼女を助けることは無駄骨でしかない。だが、俺はこうも考えた。

「(だが、今回は奴らのやり口を知っている。つまり、今の俺ならそれを打ち砕くことは楽勝だ。だったら、くだらねえ筋書きをぶち壊すの

も悪くねえ)」

垣根はそう結論付けた。その他に沸き上がった淡い感情の一切を意識的に無視して。

「はあ……、めんどくせえな」

「?……何が?」

「なんでもねえよ」

そう言つて^{ゆずりは}杓ゆずりの小さな頭を乱雑に撫でる。撫でられた彼女は目を白黒させて、何をされたのかわかっていないようだ。

そういえばこんな抜けた奴だったな、と垣根は懐かしく感じる。

そんなどこか穏やかな彼の思考に、割り込むように皿が机に置かれた。

「できたわよ。はい、肉じゃがとコーンポタージュと炊き込みご飯」

「いや、だから和と洋の個性ができすぎだろ」

「この和洋折衷とか知ったこっちゃねえ! つて感じが、如何にも心理定規メジャーさんつスよね」

「誉望、お前毒されてねえか? つーか、それ感想としてどうなんだ?」

「ふっ、そう褒められると悪い気はしないわね」

「マジで? お前の琴線が俺にはさっぱりだよ」

そんなことを言いながら食卓に並び共に朝食を取る。すると、^{ゆずりは}杓ゆずりが興奮しながら声をあげた。

「垣根! これおいしい! すごいっ、すごいおいしい!」

「おー、そうか。よかったな」

「うん! すごく甘い! プチプチ!」

そんなことを言いながら、コーンポタージュを掻き込むようにして食べる。前回はともかく記憶がある今の俺なら、何故こんなにも^{ゆずりは}杓ゆずりが食事で喜びを見いだしているのかわかった。

「(毎日味気ないレーション以下の食事しかしてねえなら、この反応も当然か)」

俺は注がれたコーヒーを飲みながら記憶を掘り返す。そして、あることを思い出して斜めで椅子に座る^{よぼう}誉望よぼうに尋ねる。

「おい、^{よぼう}誉望よぼう。それでどうだった?」

「むぐつもぐつ、んんつ……ぐくつ。そうですね垣根さんが言った通り彼女を捕まえようとする人間がいるみたいです。まあ、彼女『暗闇の五月計画』にいた一人らしいんで不思議じゃないですけど。

それで、俺が調べたところ不審な動きをする奴が居ましたが、どうもそれが警備員アンチスキルなんつスよね。

他にそれっぽい動きをする奴もいないみたいですし、コイツらで確定でしょう。……おつ、噂をすれば表にその警備員アンチスキルたちがぞろぞろと

誉望が出したタブレットには警備員アンチスキルの使用している装備を奴らは装着している。だが、俺は液晶に映る顔に身に覚えがあった。

「警備員アンチスキルからつま弾きにされた奴らで組織された、過激派集団である『DA』。

その中でもはみ出し者の殺し暴力なんでもありの暴徒共。それが奴ら『DAアラウズ』とかいうカス共の正体。俺が知っているムカつく顔が幾つかある。わかっただけはいたがこれで確定だな」

はあ……、とため息を吐くと垣根は席を立つ。それを見て誉望は垣根に問い掛ける。

「垣根さん行くんですか？なんなら俺が行って片付けてもいいっスよ」

「……あー、魅力的な提案だがここは俺が行く。お前は情報収集してくれたしな。ここで動かなかったら何もしないにもほどがあるだろ。

……それとお前は増援が来るかどうか見張つといてくれ」

「了解」

そう伝えると垣根は翼を出してベランダから降りた。

数十階の高さだが彼にはこの程度問題にもなりはしない。その後ろ姿を見たあと残った彼らは会話を続ける。

「……垣根さんって普段から「めんどくせえ」やら「かつたるい」なんて言ってますけど、基本的に誰かに丸投げってしませんよね」

「超能力者レベル5になるくらいだから元から勤勉なのかもしれないわ」

「つまり、普段の言動はあくまでもフリでしかない？」

「それはどうかしら？もともとは勤勉で頂点まで登り詰めたけど、何

か一つの切っ掛けで自墮落になるなんて、全く無い話じゃないでしょ？

例え今現在、一切のやる気が無いんだとしても、そこまで登り詰めた事実は変わらないしね」

「なるほど、肝心なところは自分でやるのは勤勉だからっスか」

「単純に他の誰かよりも自分の能力を信じてるだけかも。超能力を除いたものも含めてね。それに、敵勢力を鎮圧するのは私達の誰よりも効率がいいし」

「確かに、垣根さんなら危機的状況なんてなるはずがないですしね。迅速に終わらせるなら自分が出るのが一番、ってことっスか」

そんなことを話していると下から大きな物音と悲鳴が聞こえたが、すぐに収まった。そして、ベランダから純白の翼をはためかせ彼が帰還する。

「お疲れ様です垣根さん」

「おう、……まったく雑魚の相手はめんどくせえ……。殺さねえように手加減することちの身にもなれっつてんだ」

「……殺さないの？」

「しねえよ。あいつらは表の連中、それこそ警備員アンチスキルに引き渡せばそれで終わりだからな。気絶させておいたから逃亡するなんてまず不可能だろ」

「それと、垣根さんが予想した通り増援が来ましたね。あらかじめ配置しておいた警備システムと呼んでおいた、警備員アンチスキルで来ることもできないみたいっス。彼らはその結成理由から力業でどうにかしようとする傾向があるみたいですけど、ここまで先手を打たれればそりゃあ何もできませんよ」

席に付き途中であった朝食を再開させながら、垣根は誉望よぼうに聞いた。

「それで首尾はどうなっている？」

「順調っス。奴らの車に付けた発信器から経路は割れています。隊員の一人に付けた盗聴器も正常に稼働していますよ。」

ですが、さすがにこれはバレるんじゃないっスかね？ 奴らが大人し

く依頼主のところにもまで帰るとは思えないですし」

「だとしても、何かしらの尻尾は掴めるはずだ」

今回の騒動を引き起こしたのは木原相似。コイツが『DAアラウズ』たちを洗脳し、奴らを自分の手足として使っていた。そして、洗脳とは掛けていくほどに強度を増す。

ならば、当然かけ直す可能性は高い。それこそ遠目にも学園都市第二位の力を見せ付けられ、恐怖や驚愕に追い込まれたのならば。

そして、洗脳するときには自らを主として設定する場合、専用の装置も使うだろうが自分の姿や声を直接聞かせるのが一番効果的だ。暴れるしか脳の無い馬鹿にすると、そいつらが出した被害が管理下にある自分のせいになっちまうしな。

だから、必ず直接会い洗脳をかけ直す。正義やらなんやら小気味良いセリフで、あいつらの自尊心を掻き立てるようにしてな。

そして、^{よぼう}誉望の端末に反応があった。

どうやら、餌にまんまと引つ掛かったようだ。

「自分は部屋に籠って情報収集してきます。ここまで情報があるなら完璧に炙り出してみせますよ」

それから20秒ほどで彼は部屋から出て、木原の居場所を特定した。その情報を手にし彼は再び空へと羽ばたくべく、ベランダへと躍り出る。

それを見て彼女は垣根が何をするかを察したようだ。

「……垣根」

「林檎、ちよつと待ってる。——すぐに終わらせてくる」

「うんっ！」

そう言っただけは飛翔する。

木原相似は気付いていないだろう。自分の行いが眠れる獅子を起こしたことに。このとき彼の結末は決まった。

「……林檎ですって？」

そして、垣根帝督も気付かない。自分の安易な言動が虎視眈々と狙う女豹の琴線に触れたことに。同じく彼の結末も決まったのであった。

4話 今日だけ本気出す

木原相似そうじは興奮こうふんしていた。用意よういしていた撒き餌まき餌にターゲットが引つ掛かかったからだ。

「ふふっ！これで第二位は今回の騒動さわどうに介入かんにんしてくるでしょう！ああ、楽しみだなあ！ゆずりは 杠ゆずりは 林檎りんごを捕とまえたあと洗脳せんなんしてぶつけたら、一体いったいどんな結果けつこが待まちっているんだろうっ！」

ゆずりは 杠ゆずりは 林檎りんごは『暗闇くらやみの五月計画』で使つかわれた実験体じけんたいの一人である。

『暗闇くらやみの五月計画』とは学園都市第一位である一方通行アクセラレータの、精神性や演算方式を意図的に他者へ植え付けるとどうなるかを調べた実験だ。

その他者の人格を歪める非人道的な実験は、とある実験体の暴走で幕を閉じることとなるが、その実験は幾つかの結果を残してもいた。

その一人が杠ゆずりは 林檎りんご。

彼女は普段の能力強度は低能力者程度レベル1しかないが、多大なストレスを与あたえることによって、飛躍的に出力が増加する珍しい能力者だった。

そこに目をつけたのがこの木原相似だ。彼は代替を得意分野とする木原であった。そのため、彼は杠ゆずりはに洗脳をかけ、一方通行の代替となるように変えるつもりなのだ。

一方通行はベクトル操作。つまり、あらゆる力の向きを支配する能力者である。

そのため、一方通行アクセラレータの演算パターンであり、念動力サイコキネシスというエネルギーを加えて物を動かす力に彼は目を付けた。

彼女を一方通行アクセラレータの代替品として、生み出すために。

しかし、その計画は明確に動き出す前に頓挫することとなる。

「はが。」

それはなんの前兆もありはしなかった。

物音がしたわけでもなく、衝撃を感じた訳でもない。それこそ、何も無いからこそ不自然だった。彼がそう感じるのは当然だ。

突然日の光を遮っていたはずの天井そのものが、脈絡もなく消え去ったのだから。

「ツ！一体何が起きたんですかっ!？」

彼の頭上にパラパラと砕けたコンクリートが落ちる……ことすらもなかつた。

この世界から消滅したと言われた方が納得できるほどに、不自然なほどに跡形もなく消え去っていたのだ。

そこには始めから無かつたのではないかとすら思えるほどに、綺麗に切り取られた天井があつた。

わかりやすい違いはたった一つ。

天井があつただろう壁の縁に人影がいたことだ。

「よお、カス共。この俺にちよつかい出して無事でいられるとは思つてねえよな。久し振りに本気を出してやるよ」

そう言つて彼は三対の翼を広げた。

その不自然に発光する翼に、太陽の光で今まで見えなかつたその顔が僅かに照らされる。

翼を出す能力とその顔つき、そして今回ここで出てくると思わしき該当する能力者は一人だけ。

木原相似は驚愕しながらその人物の名前を叫ぶ。

「まさか学園都市第二位、垣根帝督ですか!?!あり得ない!そこまで即座に対応できるわけがツツ!!」

「ハツ、馬鹿が。お前の常識でこの俺を計れると思うなよ?」

まるで開戦の合図のように彼はその純白の翼をさらに広げる。そして、歌い上げるようにその言葉を言った。

「俺の未元物質ダークマターに常識は通用しねえ」



「くっ……これが学園都市第二位……！やはり、この程度の代替^盾では足りませんか!!」

盾にしていた『DAアラウズ』が次々に吹き飛ばされていく。このまま全員無力化されれば、残るは能力を持たない科学者が一人。そんな彼にこの状況を好転させる力はない。

それもそのはず、木原相似^{そうじ}にとってこの展開は予想外も予想外だった。前もってそういう兵器を用意しておく暇はなかった。

彼は考える。今回の襲撃は入念に手配し、予期されることなどあり得なかったはずだ。警備も一般的なシステムに過ぎなかった。まさか、それを常に改造し備えていたとでも？

「いや、あそこのマンションの警備システムは、他の設置場所同様に本物の正規員の警備員^{アンチスキル}が定期的に整備していたはずです。それに細工するとなるとあらかじめ予測していたとしか考えられない！」

考えれば考えるほどにわからない。だが、事実としてここに彼はいる。ならば、現実逃避など科学者としてあり得ない。

「……くくっ、どうやら僕の負けのようですね」

「当然の結果だ」

この惨状を見ればどちらが勝者なのかは語るまでもなかった。しかし、木原相似^{そうじ}の目に絶望の色は無い。

「しかし、僕はあなたの弱点を知っている」

「ほおっ？」

垣根の片眉がピクリと上がる。それを見た木原相似^{そうじ}は口を三日月に曲げて言った。

「あなたは人を殺せない。殺したことがない。今まで何度もそう言った場面があつたにも関わらず、ただの一度もね！」

他人なんてどうでもよさそうな顔をして結構お優しいんですねっ！

「……」

「それを僕は活用させていただきます。例え、あなたに再起不能なほど痛め付けられて、身体の到るところが機能不全のように陥ることになろうとも、代替して代替して代替して代替して、必ずまた僕はこの

研究を続けましょう！だってそれが科学者なのですからっ！」

その狂気に満ちた顔からは、これから振るわれる暴力の恐怖は微塵も感じられない。彼を突き動かすのは他の木原同様、溢れ出る知識欲。

そのためならば他人の人生はおろか、自らの人生すら犠牲にすることをいとわない。それが、彼ら『木原一族』だ。

そんな異常極まる狂気をぶつけられた垣根は、ため息を吐くと同時に視線を木原相似に向け、吐き捨てるように言った。

「お前、この俺を舐め過ぎじゃねえか……？」

そのときの垣根の顔と声を聞いて、木原相似は総毛立った。頭よりも先に全身が警鐘を鳴らしたのだ。

「(なツ……何ですかこの気迫はっ!?これが人を一人も殺したことがない人間が発するプレッシャーであるはずがないツ！それこそ、何十人と殺したような人間であるかのような……)」

木原相似の額から汗が一つ流れる。集めていた情報と違う。何かがおかしい。だが、それがまたしても理解できない。

彼がそうなるのも仕方ないだろう。彼の思考を読むには未来からやって来たという前提条件が必要になる。そして、それを彼が知ることは未来永劫あり得ない。

彼はいつものやる気が無い瞳から、怪しい色を浮かばせて木原相似を見下ろす。

「さすがは木原。想像通り大したムカつきぶりだ。やつぱ teme に次の機会なんて与えるわけにはいかねえようだな」

「ツ……それじゃあどうします？僕を殺して暗部にでも——ツ!?!」

木原相似が言い終わる前に、彼の翼は振り下ろされた。爆音とともに粉塵が噴き上げられたが、奇跡的に木原相似は健在だった。

その事実よりも先に彼の優秀な頭脳は、相手の意図を読み取ろうとする。

「(くツ……！何だ？まさか、目く)」

「——目眩ましなんて思っちゃいねえよな？」

「ッ!？」

その声は木原相似そうじが思っているよりも近くから聞こえた。粉塵のせいで視界はゼロだが、おそらく二メートルも離れていないはずだ。声だけが聞こえる状態で彼は変わらずに話続ける。

「この俺が自ら砂にまみれるなんてあり得ないが、敗北したあとさらに敗北を積み重ねて、そして次は負けた相手に頭を下げて頼み込もうってまでに墜ちに墜ちた俺だ。」

この程度でプライドがどうか馬鹿らしいとは思わねえか？」

木原相似にはまるで理解のできない話だったが、それでも、自らの終焉まで刻一刻と近付いているのは彼には理解できた。

「常識なんてものはな覆すためにある。それを俺の未元物質ダイクマターで証明してやるよ。じゃあな実験体モルモット。——俺の可能性の礎となれ」

彼が考えていたのは珍しく不可思議な現象を起こし続けた『未元物質ダイクマター』ではなかった。科学者としてではなく、木原相似そうじという人間が抱いた純粹な疑問。

この男は一体何だ？



「よお、帰ったぞ」

ガチャッ!と、玄関の扉を開いて入ってきたのは垣根帝督。この家の主だ。

彼は何事もなかったかのように、再びこの空間へと帰ってきた。そんな彼を待ちわびていた者がいる。

「垣根!」

普段は大人しくマイペースな杠ゆずりはが垣根に駆け寄る。そんな彼女に続くようにしてこの部屋に馴染んでいる二人が近寄る。

すると、誉望よぼうが驚愕して大きな声を出した。

「つて、垣根さん!? 一体どうしたんですか!? そこらじゅう怪我してるじゃないツスカ!？」

帰ってきた垣根はかすり傷を負い服も所々焦げていた。他の能力者ならばそれも有り得ただろうが、相手は他でもないあの学園都市第二位、垣根帝督だ。

たかが科学者一人と洗脳され暴徒と化した武装集団。その程度の相手に遅れを取るなど考えられない。

その信じられない姿に誉望は驚き、目を見開いていた。彼にとって垣根帝督という男がどれほど強いかは、身をもって知っている。だからこそ、その事実が受け止められなかったのだ。

「あー……なんだ。ちつとばかし舐めてみたいだ。木原つてやつをよ。まさか、あの状況で反撃を食らうとはな」

彼はそう言つて服を叩いて付いている塵を落とした。

「奴に対して恐怖と苦痛を与えて黙らそうとしたんだがな。奴にも意地があつたらしい。俺がわざと攻撃を外したのをみると即座に自爆して、俺を含めた辺り一帯をまとめて吹き飛ばした。

あと少し未元物質^{ダークマター}の展開が遅ければ、俺も奴と同じことになつただろうな」

その言葉に動揺が走る。木原一族は外道ではあつても科学者ではない。戦闘員でもない彼らがそこまでやるとは、ここにいる誰一人として思つてもみなかった。

「垣根さんがそこまで……木原一族、噂には聞いたことがありましたけど、そこまで彼ら腹を括つているとは思つてなかつたつスね」

「ああ、だがおかしな点が一つある」

「おかしな点? それつて?」

「奴は見た感じは自爆のようだが、それにしても辺りに肉片が一つも見付からなかった」

あの場には残った炎と粉塵、そして特殊な装備に守られていた『D Aアラウズ』しか残っていなかった。つまり、木原相似^{そうじ}の痕跡は何一つなかったのだ。

「脅すためとはいえ粉塵で姿を隠したのは失策だったな。あいつがあ

あいう手札を隠し持ってたのなら、そんなヘマはしなかったんだが。どうやら奴を見くびっていたようだ。

これじゃあ、あいつの生死がどうなったのか確認が取れねえ。これからは奴の生存も考慮しなくちゃいけないだろう」

そう言つて彼はドスンツ！と、いつも使っているソファアヘ乱雑に腰を下ろす。その様子から彼が不機嫌なことを察することができた。今までは彼の自制心でそれを隠していたようだ。

彼は不機嫌である。

それは余程の鈍感でなければ気付いて当たり前だ。暗部で生きてきた者がその程度の機微に気付かないはずがない。だが、それに違和感を持つものがこの場にいた。

彼女はそれについて言及しようとするが、彼に片手で制される。

「あー、悪いが何も言わないでくれ。俺もこれからに關すること考えなくちゃならねえんだ。それでも足りねえなら暗部に關わる以外で、お前の言うことを一つ聞いてやる」

そう言つて彼は彼女を黙らせた。その向けられた目と仕草からこれ以上の深入りは絶対に無理だと彼女は理解させられる。

その様子から彼は彼女だけに伝わるようにしていた、張り詰めていた雰囲気崩し、ゆずりは 杠 林檎に目を向けた。

「悪かったな林檎。奴を確実に潰すことができなかった」

「ううん、垣根が無事ならそれでいい」

「……」

その見上げられた視線から垣根は一瞬だけ目を逸らした。だが、再び彼女を見据えて言葉を投げ掛ける。

「それでだ。お前どこか安全な場所に心当たりはあるか？」

「……ない。私ずっと表の世界にいなかったから……」

「なら、俺のところに来ねえか？」

「え？」

その言葉に彼女は伏せていた顔を上げた。

「今回俺はお前を襲う奴らを潰すつもりだったが、俺のミスで最悪な形で幕を閉じちゃった。生きているのなら影で奴が暗躍しねえとも

限らない。お前を助けるなら身近にいる方が確実だ」

「本当に……う？本当にいいの？私……垣根の側にいてもいいの？」

「嫌か？」

「ううんっ……！私、垣根の側にいたいっ！」

「よし」

そう言うと、垣根はいつしかのように彼女の頭を撫でくり回す。それは前と同じく女の子を相手にするものではなく、まるで動物にでもするような手つきであった。

だが、前回と違うところを挙げるのならば、今回はゆずりがつぶ目がつぶ瞑りながらも、微笑みを浮かべていることだろうか。

彼女は今までしていなかった嬉しそうな表情で、彼の手を受け入れていた。

こうして、彼女は温かな空間の中で彼らの一員として加わったのだった。

5話 計画通り

ここにいることを許されて、はにかんでいる林檎を見ながら俺は思考にふける。木原相似そうじが生死不明となりゆずりは枉林檎ゆずりはがここに居座った。

そんな曖昧な結末を俺は一言で受け止める。

「(全て計画通り上手くいったな)」

そう、ここまででは全て俺の筋書き通りの展開だ。周りからは大失敗とも受け取れる今回の結末だが、俺からすればこれ以上無い手であった。

「(なにせ、木原相似を始末することができた。これで後顧の憂いを断つことができる。これで林檎が襲われる危険性はかなり下がったはずだ)」

俺は奴を殺すことを始めから決めていた。奴は木原一族、害しか生み出さない社会のゴミでしかない。百害あって一利ないのだから奴を生かす理由を探す方が面倒だ。

そして、奴の諦めの悪さは前回体験済みだ。それを踏まえても奴に付き合うなど時間の無駄でしかない。わざわざかかったるいことを増やす趣味は俺にはなかった。

「(問題なのはその殺し方だった。いくら悪党とはいえ表の世界じゃあそれだけで捕まっちゃう。そうなれば暗部に叩き込まれるのは確定と言ってもいい。)

とはいえ、はつきり言って暗部をそこまで拒絶する意味はない。暗部での生き方はもちろん俺は本質的に悪党だ。今さら殺すことに拒否感はない)」

では、何が問題なのか？そんなもの決まっている。

「(垣根帝督が暗部に入ることは、当たり前だと考えている奴らが気に入らないってのもあるが、俺は前回とは違ってアレキスターとの『直接交渉権』を欲してるわけじゃない。)

今の俺が欲しいのは現在の学園都市ではなく、未来の学園都市にある。近いうちに終わる今の学園都市なんざに囚われるわけにはいかねえんだよ)」

俺が見据えているのは今は誰も想定すらしていない、未来の学園都市だ。そこに辿り着くまでに余計な足枷を付けるなど、邪魔でしかなかった。

その状態で木原相似そっじを殺すのであるならば、完全犯罪をしなければならぬのは自明の理だ。

「まあ、これを『完全』と呼ぶには、いささかスマートさが足りないがな」



「……チッ！やってくれるじゃねえか」

そうやって身体を覆うように展開した未元物質ダークマターを彼は通常の状態にし、改めて爆炎に隠れた敵を見据えた。

「邪魔だ」

そう言うと、一風ぎで目の前にある死のカーテンを吹き飛ばす。しかし、そこに木原相似そっじの姿はなかった。

垣根はその後も辺りを飛び回り搜索するが、結局木原相似の痕跡は何一つ見つけられずにいた。

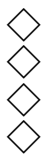
そして、数十分後。

空中を飛行していた垣根はピタリと止まり、風を肌で感じながら内心で呟く。

「——さて、演技はこの程度でいいだろう。滞空回線アンダーラインはもちろん、人工衛星からも俺が奴を消したようには見えないはずだ」

今しているのは、言ってしまうえば犯行のアリバイ作りの一環だった。彼は風をその身に感じながら頭の中を整理していく。

「(奴を始末する上で面倒だったのがその二つだ。それを騙すためにわざわざ自分で作った爆発で吹き飛ばされたんだからな)」



木原相似が認識したときには全てが終わっていた。

「何、ですかこれは!? 遺灰——ではありませんね。まさか、これは本物の砂ツ……!?!」

未元物質の翼で斬られたところから、身体が砂になり崩れていく。垣根が操る未元物質はこの世にない素粒子を扱うため、形状や強度に囚われない特性を持つが、彼の力が及ぼす範囲はそれだけにとどまらない。

「俺の未元物質はこの世に存在しない物質だからな。当然、未元物質を通して引き起こす結果も、この世界の物理法則とは違ったものになる。これは俺の未元物質特有の演算方式から導き出した事象の一つだ。」

——まあ、もう聞こえちやいねえだろうがな」

パシヤアツ!と音とともに、砂の塊となった彼は呆気なく崩れ落ちる。それが木原相似の最期だった。

前回のように未元物質が及ぼす数千の事象を見せることなく、垣根は一方的に淡々と惨殺する。そして、垣根はそのことになんの感慨も見せず、すぐに次の行動に移った。

「ここまでは予定通りに進んだ。そして次の工程で最後だ」

そう言うと、彼は二つの翼を両隣に配置した。この二つの翼をぶつければ辺りを吹き飛ばすほどの大爆発が起きる。これも、未元物質というフィルターを挟むことで生まれる事象の一つだ。

彼は不敵な笑みを浮かべて断言する。

「この街のイカレた技術をもってしても、俺の未元物質を常識に当て嵌めるのは不可能だ」

そして、ほどなくして昼の学園都市が騒然となるほどの大爆発が起きた。



「(最初から最後まで自作自演のものでしかなかったが、これなら俺が奴を殺したかどうかすらわからない。つまり、俺を指名手配犯にすることは不可能だ)」

死体はおろか血痕一つ無い状況で、犯罪が本当にあつたのかわかるはずもない。

「(奴を砂に変えたが爆風で吹き飛ばしたし、何よりあそこで俺は、未元物質を発動させて戦っていた。

砂や瓦礫が俺の未元物質でその性質が僅かに変質するなど、普通にあり得る話だ)」

彼は木原相似(そっじ)のDNAよりも遥かに砂の成分へと近付けたが、それでも他の物より変化しているのは否めない。

だからこそ、わざわざ時間をかけて『DAアラウズ』を吹き飛ばしながら、他の無機物も未元物質で変化させておいたのだ。

「(滞空回線は学園都市に5000万ほどばら撒かれた目に見えない微細な監視機。この街でそれを騙すのは日常生活ならほぼ無理だが、視界をゼロにできる状況なら当然それも違ってくる)」

滞空回線(アンダーライン)は言ってしまうえば小さな撮影機器だ。別に体表熱感知装置が取り付けられているわけでもないのだから、砂煙などで視界を塞いでしまえばそれで潰すことができる。

「(他にも未元物質を微振動させ空気に干渉し、音の遮断膜を同時に展開するなんて細工もしたが、それも学園都市の上層部が情報そのものを捏造すれば話は変わってくる。まあ、それにも当然手を打ったあとだけだな)」

一つは警備員(アンチスキル)。

垣根は自宅の近くで警備員に『DA』を引き渡している。それを見た正義感の強い彼らの証言は必ず上がってくるだろう。

二つ目はタワーマンシヨンの住人だ。

彼はすぐに鎮圧したがそのときに何人かの住人に見られていた。それもそのはず、彼が襲われたのは真つ昼間の時間帯なのだから。

そして、三つ目はそのときに捕まえた『D Aアラウズ』。

そいつらは既に正規のは警備員アンチスキルの手に渡っている。今さら口出ししても必ず文句が出るに決まっている。

「警備員アンチスキルは民間の教師で組織されている。そんな先生たちからすりゃあ今回の騒動は、かつての同僚たちが守るべき子供に対して、事件を引き起こしたようなもの。」

上からの命令だとしても大人しく黙っているのは、果たして何人いるかな？」

彼らを能力を持たず権力もないただの人間と、断ずることはできない。彼らの教える子供は皆能力者であり武力を持つ子供だ。

彼らが子供たちに今回のことを説明すればそれこそ暴動が起きかねないし、言わずにその教師たちが上に肅正されても、数が多ければ風紀委員が動き真実を見つけ出す。

そうなれば泥沼の始まりだ。

学園都市第二位を暗部へと引き込む代わりに、学園都市中の人間の不信感や敵意を持たせることになるのは、果たして釣り合いが取れているのだろうか？

いや、そんなことはないだろう。学園都市の上層部ならば今回は木原相似そうじに関わることで俺に脅しをかけてこず、また次の機会を窺うに決まっている。

「まあ、今回で目を付けられた可能性が高いがな……」

「どうかした？」

「いや、なんでもねえ」

心理定規メジャーハートの問いに適当に返事をしながら、彼はこの先の展開を予測する。

「(今回は俺があれを起動させちゃったが今回はあのときと状況が違う。だが奴らがそれで何もしない理由にはならない。きつと何か仕掛けてくるはずだ)」



「ハア……まさか、林檎ちゃんが第二位の庇護下に入っちゃうとはね。さすがに超能力者に喧嘩売って勝てるとは思わないし、今回の依頼はここまでだな。」

依頼人も行方不明のままなんの連絡も寄越さないし、多分だけ死んだかな？お陰で用意していた物が全部パーなのはもちろん、報酬も無しなんて言う無駄骨だ」

そんなことを言いながら作業しているのは黒夜海鳥。彼女は『暗闇の五月計画』の一人にして数少ない生き残りにして、多くの研究者を惨殺し計画を終わらせた張本人である。

そんな彼女は依頼主である木原相似そうじの研究所に入り込み何か得られるものはないか物色していた。そして今彼女は、彼が使っていたパソコンを操作し何か情報がないか調べている。サイボーグ技術は興味深く一番の収穫となるだろうことは、わかっていたがもう少し何か欲しいというのが、彼女の本音であった。

「だが、出てくるのは『暗闇の五月計画』のことばかり。これは当てが外れたかな？………ん？これは」

すると、その途中である文言が浮かび上がってきた。それは、今まで調べていた情報とは違ったタイプのものだ。

「……オイオイ、いきなり出てきやがったと思っただらなんだこりやあ？つか、記述式そのものが全く違うねエかこれ？」

黒夜はその新しく出てきたその表示に、怪訝な顔をして眉根を寄せた。彼女はその出てきた不穏なフレーズをつい口に出して呟く。

「自壊プログラムねエ？」



同時刻。

垣根の部屋でゆずりは杠林檎が倒れた。

6話 嘗て闇に堕ちた英雄

「どうしたの!？」

今さつきまで嬉しそうに笑っていた^{ゆずりは}杠 林檎が倒れた。その顔には苦痛が浮き出ている。

「……………やはり、来やがったか。」

「持病……………いや、『暗闇の五月計画』の後遺症か!？」

誉望^{よぼう}が言った後遺症は間違っではない。林檎には実験の後遺症で異常な眠気と、記憶の消失が時間の経過で進む症状がある。

だが、今回の原因はそれじゃない。俺はそれを前回の記憶から知っている。

「垣根……………お願いがあるの」

息も絶え絶えの様子で俺に言葉をかけてくる。俺は膝を折り林檎の背中に腕を回して、聞き逃さないように近付く。

彼女は手に入力俺のスーツに皺を作る。まるで、俺の存在を確かめるように。

そして、林檎は言った。

「私を覚えていて欲しい」

「……………」

「……………あの実験で死んだ私の友達を誰も覚えてなかった……………。だから、私は私の存在を他でもない垣根に覚えていて欲しい……………。それだけが私の唯一の願い……………だから、私を垣根の手で終わらして欲しい」

つまり、林檎はこう言っているのだ。俺が殺すことで自分の存在をその胸に刻み付けて欲しい、と。

忘れられることが本当の死だと彼女は考えている。

元々、^{チャイルドエラー}置き去りの被験者たちはその境遇から人との繋がりも薄い。そのため、彼女たちは死んでしまえばその死に嘆く人の数は、一般人と比べれば圧倒的に少なくなる。だからこそ、その価値観が身に付いたのだろう。

死ぬことが余りにも身近過ぎたために、死んだとしても誰にも覚え

ていてもらえない。そして、誰かに覚えられていなければ自分が存在したことも無くなってしまおう。

ゆずりは 杠 林檎の救いとは大切な人の手で殺され、その人の記憶に残り続けることにある。

彼女は俺の手を取りその細い首へと添えさせ、綺麗な笑顔を浮かべて囁くように言った。

「私を殺して……？」

前回はそうだった。

彼女は覚えられて死ぬことが救いだと思っている。おそらく、その考えは間違っているとは、断言できないものなのだろう。

彼女の記憶は実験の後遺症で刻一刻と無くなっており、さらには今現在臓器の機能停止を外部から受けている。このままだと辿る未来は必死のみ。

だからこそ、彼女は願っているのだ。

苦痛からの解放ではなく自らの存在を遺すための死。それを彼女は心から望んでいる。そんな彼女に俺は告げた。

「……俺はヒーローじゃねえ。俺はどちらかと言うと悪党の側だ」
それを俺は自覚している。

この世界で真つ当に生きてきただとか言うつもりはない。この世界では違うのだとしても巻き戻る前に俺は人を殺し過ぎた。俺は真正銘の悪党だ。後ろ指指されて生きていくのが正しい人間だ。

そして、今さつき木原相似そうじを殺した。前回同様今回も、無事に学園都市にいる悪党共へ仲間入りだ。

そんな俺がヒーロー？誰かを救う？どう考えても無理だろう。柄にもないことするなんざ面倒なことこの上ない。そんなのは御免蒙ごうむる。

俺は林檎の手を振りほどきながら言った。

「——だから、俺はお前を救わない」

「……………垣……………ね……………」

「だが、お前を死なすつもりも毛頭ない」

俺に誰かを救うことなんてできはしない。だが、それ以外のことなら俺にはできる。

嘗ては学園都市の闇の底へと身を落とし、人間という種の枠組みからも超越して、未元物質ダークマターの無限の可能性にまで届いた、他でもない俺ならば。

「お前を取り巻くその面倒事を、俺がまとめて終わらしてやる」
俺は背中に未元物質切り札を展開した。



バサツ！と開かれたその翼を再び目にし、私は純粋な感情を抱いた。

「綺麗……」

その翼はどこまでも白く綺麗だった。それこそ、目の前に迫る死の危機なんて忘れてしまうくらいに。

『暗闇の五月計画』の実験施設で、私たちに植えつけられた一方通行アクセラレータの演算パターンと比較するために、研究者から見せられて初めて見たそのとき、彼の能力に憧れた。

綺麗な純白な翼。その翼を初めて見たときと同じように私の頭にその言葉は浮かんだ。

「(ああ、……やっぱり垣根の能力を植え付けられたかったなあ……)」



いつもの飄々とした態度とは違って変わり、深刻な表情をしながら心理定規は聞いてきた。

「……でも、どうするつもり？彼女に一体何が起きているかもわからないのよ？」

「なら、それを調べるまでだ」

「しかし、ここにはそんな医療の機材はありません。この急変具合から見てもどのくらい持つか……ッ」

「だったら、ここで俺が見つげ出す」

本来ならばそんなことは不可能だろう。実際に細菌やウイルスの類いであれば、どれだけ未元物質ダークマターを駆使しようが助けようがない。

だが、俺は知っていた。杠ゆずりはの急変は持病や実験の後遺症ではないことを。

「自壊プログラム。学園都市の上層部が施した杠ゆずりは林檎を殺すための細工で、その内容は特定の臓器に対しての停止命令。つまり、それが林檎の危機を脅かしている元凶。」

なら、話は簡単だ。それをどうにかすれば林檎は助かる」

元凶がはつきりしており、尚且つそれがどこで起きているかも知っている。その上、解決するための策があるならば行動しない理由は何一つ無い。

「林檎、俺はさっき言ったな。俺はお前を救わないってよ。ヒーローじゃない俺にはそんなことはできない、その事は他でもない俺が誰よりもわかっている」

苦し気な表情の中で垣根を見詰めるその瞳には困惑があった。だが、その様子を垣根帝督は馬鹿にはできない。なぜなら、杠ゆずりはが感じていることを垣根も同様に感じていたのだから。

果たして自分にそれができるのか？それをする資格はあるのだろうか？

一方通行アクセラレータに嘗て言ったことが自分自身にへと返ってくる。悪党たる自分にはそれは許されざる行為なのだ、と。

だが、垣根はその全てを飲み込む。

「矛盾も自己嫌悪も俺自身が抱え込めばいいだけの話だ。俺の過去にこいつが巻き添えを食らう道理なんて、何一つ無いんだからな」

垣根は気付いているだろうか。その思考が逆行してからも変わら

ずに、一番に嫌悪感を抱く人間が常にもがき苦しんでいた苦惱と同一だということに。

彼は^{ゆずりは}杠に断言する。

「お前が今まで考えもしなかった選択肢を俺が与えてやる」

今から言うことはこの上なく自分らしくないだろうということ。彼は自覚する。どの口が、とも思うし、何より自分がこんなことを本気で言おうとしていることに羞恥を覚える。

前回ならば決して言うことなどありはしなかっただろう、その言葉。

しかし、彼には既にわかっていた。

——運命を変えるにはまず自分自身が先に変わるしかないことを。救す以外の方法で彼女助けるために。

彼は一瞬目を瞑^{つぶ}ったあとに、一息で言った。

「俺がお前を幸せにしてやる」

「……………幸……………せ……………?」

^{ゆずりは}杠はその聞き慣れないフレーズに戸惑っているようだ。心からこんなのは柄ではないと思いつながら、彼は続けて言葉を紡ぐ。

「料理食って旨いだとか誰かと話して面白いだとか、そんなありきたりなモンを感じながら生きていくことだよ。

救いだなんていうのは死んだら終わりだが、幸せなんていうのは生きてれば感じられる時も来る。なら、そっちの方がよっぽど生産的だろうが。そして、それをこの垣根帝督が手助けしてやるって言ってるんだ。それに何か不足があるか?」

その綺麗な眉が下がり眉間に皺が寄ったのは、^{ゆずりは}杠 林檎から反応がないか。はたまた自身の内から沸き上がる感情からか。わかるのは垣根帝督ただ一人だ。

^{ゆずりは}杠はその問いに自分の現状を言う。

「……………でも、私、多分このままだと……………」

「だから、俺がそれをどうにかしてやるって言ってるだろ」

垣根は杠ゆずりはを掴む手に力を入れる。

「お前がすることは俺を信じてることだ。信じて身を任せろ。そうすりゃあ、俺がお前を治してやる」

その瞳の強さを間近で見た杠ゆずりはは、このとき人生で初めての価値観と出会った。それは今までは思いもしなかった考えだ。

だが、それをすぐさま受け入れられるかは別の話。

「……」

何より彼女は今まで自分が信じてきた願いを否定されたことに、ショックも受けた。今まで培って自分を支えていたものの一つが否定されたのだから無理もない。

そして、その新しい価値観を受け入れるには彼女に経験も時間もなかった。

——だが、彼女には彼の存在がある。

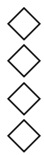
「(私にはそれがどういうものかよくわからないけど……垣根がそういうなら、それもいいかもしれない)」

彼女はその一要素で決めた。

死の間近で投げやりな部分もあったろうが、それでも今までの価値観を取り下げた。その事へ当然のように不安や恐怖はあったが、真剣な様子の彼がそこまで言うのだから、きつと素晴らしいものなんだろう、と。

杠ゆずりはは彼に再び願った。

「うん、わかった。私を幸せにして欲しい」



彼はこの逆行してからの記憶を思い出す。

「(一度目は逆行しても変わらずに無理だった。あのときは、状況が切迫していたし今のように十全に能力を使える姿でもなかった。)

——だが、今回ばかりは変えてやる。学園都市の闇だろうが運命だ

ろうが知ったことか。学園都市第二位を舐めてんじやねえぞ！」

彼は前回では取らなかつた方法を取る。

背中から伸ばした未元物質ダークマターを極小の糸に変化させた。

「未元物質はその形状や強度を自由に変化させることができる性質からわかる通り、この世界の法則を歪められる自由度が高い。そして、それは裏を返せば未元物質はこの世界の法則を受け易いとも言える。未元物質ダークマターをこの世界に適応させるわけじゃなく、この世界の法則を未元物質ダークマターに適応させれば、人体に全く無毒な物質へと変えることができるってわけだ」

彼はそれを前回は実際に自分に適応した。一方通行アクセラレータに壊された身体を未元物質ダークマターを使い、一から作り直していた。

そのときに残っていた脳や臓器も一時期、未元物質ダークマターの身体の一部としていたことから、人体と遜色無い物質に変貌していたことがわかる。

全ては学園都市の闇の中から得た技術と知識。外道から生まれた忌まわしき力ではない。

「だが、それがどうした。手段なんてどうでもいい。今あるモンを全て出さないのはただの馬鹿だ。そんなことすら、わからなくなるほど落ちぶれたつもりはない」

彼はその極小サイズの未元物質ダークマターをゆずりは杠の小さな口から体内へと侵入させる。

誰かを殺したり何かを壊したりせずに、直接誰かを助けるために能力を使う。垣根は未元物質ダークマターを逆行する前もした後も、そういった使い方はしてこなかつた。

能力強度の分類はその科学技術の応用性や放出される出力で決まる。能力者を無能力者レベから超能力者ベルで分類していく中で、分かりやすい能力者の分け方の一つが、『一人に対抗できる戦力』だ。

その事からもわかる通り、能力者は人の形をした兵器と言い換えることもできる。

ならば、能力の本質は『暴力』であると認識するのは当然だった。それこそ、前回の垣根帝督ならば。

「(前は気づきもしなかったが今の俺は知っている。未元物質は破壊を生み出すのが本質じゃなく、今まで存在しなかった新しい物質を生み出す、その生産性こそが本当の真価だってことをなッ!)」

見えないほどに細い一本の未元物質を経路にして、風船のように膨らみ止まった臓器と寸分違わぬ、形状と材質の物を生成していく。常識的に考えれば押し出された未元物質は、毛玉のように乱雑な塊になるはずだが、未元物質は彼の超能力。

膨らんでいく形はもちろん、進行速度や必要な未元物質の適量も全て演算によつて算出している。そんな彼にミスなどあり得ない。

だから、彼の敵は時間だけだった。

いくら代わりとなる臓器が作れるのだとしても、生成するのにも時間がかかる。枉が未元物質が体内に入るのを許容できなければ、実行することができなかつたとはいえそれで時間が削られていたのも事実だ。

「(………垣根)」

初めて見る額から汗を流すほどに真剣な垣根帝督がそこにはあった。

いつもの気だるげな様子は一切無い。そんな彼の懸命な姿を見て枉は思った。

「(きっと、垣根は私のことを忘れない。私がここにいたことを覚えていてくれる気がする……。なら、もう大丈夫。何も怖くない)」

彼女の心にあつたのは恐怖ではなく感謝だった。自身を助けるために全身全霊をかけている垣根と、私が憧れた『天使』を自分の前に連れてきてくれた運命に。

彼女は最後に万感の想いを込めて彼に伝えた。

——ありがとう

とあるタワーマンションの一室。そこに彼はいた。

彼はいつも通り茶髪の髪を整え、ブランド物のスーツを袖に通しいつもの格好へと変わる。

見た目はホストか何かに見えるが、その目は相変わらず活力がなくやる気を全く感じられない。

それが今の学園都市第二位、垣根帝督。

例え、何があっても逆行した彼のあり方は変わらない。逆行というイレギュラーは彼のあり方を変え、彼は善も悪とも言えない彼だけの道を行く。それが彼の今の生き方だ。

大きなエントランスを通り抜けて、学園都市の街並みを歩く。傍らにキャミソールの上からジャージを羽織った少女を連れて。

「ねえ、今日は何を食べるの？」

「お前って本当に食いモンばっかだな」

呆れながらも、彼女の歩幅に合わせる彼から嫌悪感を感じられない。端から見れば子供に振り回される青年でしかなかった。

自分がそんな微笑ましい姿だとは知らずに、彼は気だるげに歩いているとふと道端のカフェが視界に映る。

懐かしさを感じながら彼はそのフランス料理の名前を口にした。

「あー……、そんじゃあ今日はガレットだ」

7話 黒幕たち

とある研究施設のその一室に、リクルートスーツの上から白衣を身に包んだ女性が椅子に座っていた。彼女は椅子に寄りかかり一人言を呟く。

「うーん、今回の第二位へ『悪意』を注入するのは失敗でしたかねえ？前回もそれといった反応はなかったので望み薄でしたが、まさか未元物質を臓器にして遠隔から動かすとは。」

そう言った考えに結び付かないようにコントロールしていたはずなのに、どういったプロセスで生まれたのでしょうか？」

疑問を浮かべるが理解ができない。そういう風に仕向けていたのだから当然だ。

そんな彼女にゴールデンレトリバーが近付く、その犬は彼女のペットではない。それこそ、彼女が唯一この世界で敬う存在である。

「ほう、彼は君の想定外の範囲外へと飛び出たか」

「あ、脳幹先生！」

パツと椅子から立ち上がりその犬に駆け寄る。その犬は背中から折り畳みのアームを展開し、葉巻に火を着けると口に加えて煙を吹いた。

そして、またしても機械を通して彼の声が発せられた。

「彼は学園都市に『未元物質の超能力を宿す能力者』として設計されたはずだが、以前から既定の路線を外れる傾向がある」

「そうなんですよ。すごく気持ち悪いですよー。設計図通りに組み立てたはずなのに不具合が発生するなんて、はつきり言ってあんなのただの不良品ですよ不良品」

「そう言ってやるな唯一くん。私からすれば彼の不可解さは嫌いではない。まあ、奴からすれば不愉快な事かもしれないがね。」

そして、個人的な話になるが彼の能力を私は気に入っている。あらゆるものを生み出せる物質は、科学者としても私の趣味とも合致して好奇心をくすぐってくれる珍しいものだからな」

「いつものあれですか？」

「ああ、ロマンがあるのはそれだけで魅力的だ」

彼の名前は木原脳幹。

始祖たる『木原』という枠組みを作り出した、科学者たちにより生み出された人の知識を持つゴールドデンレトリバー。

アレイスターⅡクロウリーの右腕でもある彼には、一人の弟子がいる。

それが、彼の目の前にいる、木原唯一。

彼女は一見地味な冴えない女性にしか見えないが、その実他の木原とは別格なのは、あの木原脳幹の側にいることから察せられる。

科学者でありながらロマンチストという、『木原』にはあり得ない要素を持つ者が木原脳幹であり、『木原』を研ぎ澄ませた残虐性を持つのが木原唯一と言った具合だろうか。

「いつそのこと、助けた杠ゆずりは林檎と彼の回りにいる友人たち全員を殺してしまえば、既定路線へと乗り上げてくれますかね？ そうなれば、いくら彼でも完全に無視はできないのでは？」

「唯一くん」

「はいはい、わかってますよ。無駄な犠牲はナンセンスなんですよね。でも、結局は合理性や効率性を最終的に取るなら、それって意味があることなんですかね？」

「私たち科学者はすべからくロマンチストでなければならぬ。その感情こそが人と獣を分ける一線だと私は思ってる。最後には『木原』らしい外道な選択をすることになっても、その追及は切り捨てはならない美点だと私は思う」

「……ふーむ、何回聞いても理解はできるんですけど、ピンとこないですわー。私と先生が一つだけ噛み合わないところですよ。先生のそういうところ好きではあるんですけど」

「何、これは感性の問題だ。君に強要はしないさ」

木原唯一は尊敬する脳幹の感性が分からずに唇を尖らせて拗ねた。尊敬する人（？）に近付きたいと思うのは、一般的にも自然なことだろう。

彼女は先程の話題へと話を戻す。

「でも、何かはする必要がありますよね？このままではもつたいたないですし。それに、ただ消すよりも面白そうな変化をしてくれそうだしね」

「うむ、奴の計画プランにもそれは組み込まれているはずだ。間違いなくそれは免まぬがれんだろう」

「はあ……、やっぱり気に入りませんねえ……。先生がああの男の下に付くなんて間違ってます。原アーキタイプ型制コントロール御さえなければ先生が頂点に立つてもおかしくないのに……」

「私を買い被り過ぎだよ唯一くん。それに、この街の『王』は奴だ。それを否定しても意味がない。そして、私は奴の計画に賛同している。とはいえ、これも善悪で言えば悪で、好悪で言えば好ましいだけではないのだろうがね」

そう言った彼らはその場をあとにする。

学園都市の深奥にいる木原として彼らにはやることが多いのだ。



窓の無いビル。

この街の象徴するシンボルの一つにしてこの街の主の根城だ。巨大なビーカーの中で逆さまで浮いている『人間』は、抑揚の感じられない声で言った。

「ふむ、未元物質ダークマターの設計図から外れた異常な行動は変わらず、か」
その声は男にも女にも聞こえ、若い声にも年老いた声にも聞こえる不思議な声音だった。

「私の計画プランは例え失敗したとしても別の道筋を辿り、最終的に目指す到達点へと辿り着くように組まれているが、ここまでのイレギュラーばかりの存在の扱いは果たしてどうするものか。

悪意を持つならば御し易く、善意を持つならば誘導してやればそれで済むが、そのどちらも関心を持たないとはな」

正確には違うだろう。 枉ゆずりは林檎を助けた以上は再び助けようとはするはずだ。 失敗すれば慟哭を上げるほどに取り乱すかもしれない。 しかし、例え仮に枉ゆずりは林檎を彼が失ったとしても、憎しみに駆られて動くとは考えられなかった。

「それは、彼のこれまでのあり方から推察できるが、私が言っているのはそんなデータで計れる程度のことではない。

失敗を許容しながらも最終目標だけ叶えられればそれで良しとする意志。君のそれは、他でもない私のような挫折や絶望を味わいながらも歩みを止めない者が持ちうる、執着と渴望の目だ」

だからこそ、無理だと断じる。

彼は自分と同じように何かを到達点と定めている。それを崩さなければ自暴自棄になることはないはずだ。

己が自らの目的のためにこの科学の街を作り上げたように、彼も周囲の人間が誰もいなくなったとしても、自らの望みを叶えるために一つのことだけに邁進するだろう。

そのことを、アレイスター・クロウリーは自らの歩み身に付けた人生観を基に導き出す。

とはいえ、230万人を科学の街に閉じ込めたこの『人間』が、その程度のことです重などするはずもない。

「だが今は、揺さぶるだけにしても時期尚早だろう。そして、あくまで彼は一方通行を失ったときの第二候補スペアプラン。そこまで急ぐ理由はない」

そう結論付けると、酷薄な笑みを浮かべ最後にこう締め括った。

「学園都市第二位、未元物質ダークマター。いや、我が同類よ。いつまでも傍観者でいられるとは思わぬことだ」

8話 心理定規の追憶

その日、彼女は不機嫌だった。いや、ここ最近はほとんど毎日この調子だ。

そんな彼女の名は心理定規。^{メジャーハート}もちろんこれは通り名であり、本名を知っている者は少なくともいつものメンバーにはいないほどに、徹底的に秘匿をしている少女だ。

そんな自分というものを滅多に表に出さない少女は、今現在誰もこの一室にいないとはいえ、苛立ちを隠さずに表に出していた。

彼女が不機嫌なのは最近加わった^{ゆずりは}杠 林檎が原因である。

とはいえ、彼女に嫌悪感を抱いているわけではない。彼女は世間知らずのところがあるものの、それは子供らしく感じる可愛い一面であった。

さらに、基本的に大人しく好戦的ではないところは彼女にとって好印象である。では、何故不機嫌になっているかと言うと、それもこれも彼のせいであった。

「何が俺が幸せにしてやる」、よ。いくら生きること希望を抱かせるためとはいえ、中学生かも怪しい女の子に言うかしら普通」

ムスツとわかりやすく顔を崩している彼女は、いつも彼に見せる表情とは違った態度を取っていた。

今彼らは買い物に出掛けている。普段はめんどくさがりの方が、進んで動いてくれることはほとんど無いが、キッチンを仕切っている(占領ともいう) 私に文句は言わない。

そこは彼なりの真面目さなのか、はたまた何かしらの信条があるのか、ただ与えられるだけではなく必ずそれに見合う何かで帳尻を合わせようとしていた。

「(彼ってやっぱり本質は生真面目なのかしら？ 普段の態度がフリだとも思えないし元来の性格かしらね)」

今回も面倒など言っていたがすぐに了承していたのだから、あなたが間違っていることでもないだろう。

とはいえ、そこに^{ゆずりは}杠が付いて行く必要性は特にないのだが。

というのも、今まで非常食同然の食生活をしていた彼女には、社会勉強になるということで彼に付いて行くことになった。

最初にゆずりが垣根に付いて行きたいと言い、それによぼうが賛同しながらさっきの理由を述べて、垣根がめんどくさそうな顔をしながら了承した。

ざっと説明するとこんな感じである。

彼女は同行せず彼のマンションで寛いでいた。……とても寛いでいるようには見えないが。彼女は彼の一室で彼らの帰りを待っているのだ。そもそもの話だが、彼女が一緒に行くのを断ったという経緯がある。

「さすがに、最初の数日は彼の隣に居られるように気を配ってるけどね」

彼女は空気が読める女の子だ。

それは、人との精神距離を測る能力、メジャーハート心理定規の影響が大きい。本来は曖昧なものでしかないその繋がりを数値化できる彼女は、ごくごく自然とその処世術が身に付いた。

あの子には寄る辺が必要だ。それは自分を庇護してくれる場所はもちろん、精神的にも。

話を聞けばそれ相応の悲劇に遭っているらしい。不安定な彼女には彼は必要な存在だった。

「まあ、あの子に譲ったのはそれだけじゃないけど」

処世術はあってもそれに身を任せるかどうかを決める強さが彼女にはあった。人の好感度を自由に操れるためわざわざ気にしても無駄なだけなのかもしれない。

彼女としてもあの少女のためにはそれが必要だとは思いうし、あそこで感情的に反論するなど馬鹿らしいにもほどがある。

……とは思うのだが、それがほぼ毎日のように繰り返されていれば、当然文句の一つも言いたくなるのが乙女心なのだ。そんな自分の道に行く彼を思い浮かべながら、淹れた紅茶を飲みながら彼女は思った。

「(本当に、あのおときから変わってないわね)」



少女は路地裏を走っていた。

この学園都市では路地裏という場所は、人目に付かないため危険ではあるが、絶対に利用してはいけないということはない。近道として利用する学生も多い。そのため、少女がその道を走っていることに不自然な点はない。

おかしなところを挙げるとするならば、モーター音が鳴り響きコンクリートを擦るような摩擦音が、彼女をまるで追い掛けるように聞こえることだろう。

「はあ……はあ……、まさかこの私がこんな目に遭うなんて思ってもいなかったわ。上手く立ち回れていると思ったんだけど……」

派手なドレスを着た少女は大量の汗を流しながら、荒い息を吐いていた。まとめていた金髪の巻き毛は走っていたせいもあり、解ほどけてしまっている。

顔に張り付く髪を鬱陶し気に払い、今自らが置かれている状況を把握する。

「……付近に人を近寄せせないようにし、襲撃する方法も遠隔操作の殺戮兵器。私への対策はバッチリってとこね」

どこかの第五位とは違って、彼女は運動神経もいたため拳銃の扱いにも秀でている。飛行してくる兵器を射撃はしたが装甲が厚く、一つ二つ撃ち落とすのが限界であった。

そこで彼女は方針を切り替え、逃走を謀りながらも通りすがりの能力者や通行人に能力を使い、盾として利用する算段を着けた。

時間帯は夕暮れではあるが生徒の完全下校時間にはまだほど遠く、誰かが出歩いているのはわかりきっていることだ。

しかし、それを相手は見越して先手を打っていた。

「帰宅途中の学生はおろか縄張りスにしている武装無能力者キル集団アすら

いないなんて、ここまで根回しをするには警備員アンチスキルのような一部隊が必要になる。仮に偽装なのだとしても、相手は殺戮兵器と顎で動かせる部隊を持つほどの権限を持つ相手。……私個人でどうこうできる範囲を超えてるわね」

ならば、どこかの組織を味方に付けなければならぬのだが、既に敵は動き自らは窮地に陥っている。彼女にそんなチャンスはありはしない。

「人の心を操り利用してきた因果応報ってやつかしら。誰に恨まれているのかなんて余りにも多すぎて特定することは無理ね」

そして、遂に彼女の足が完全に止まる。

それは、自らの置かれた状況を理解したからではない。目の前に鋼鉄の機械が現れたからだ。彼女の瞳から諦観が滲み出た。

「……ここまで私に対して対策をしてくるなんて思わなかったわ。手の平の上ってこういう感じなのね。思ったより自分にされるのは腹が立つわ」

その外観は昆虫に類似したものだ。これは二本脚の人型よりも重量のある兵器を積みながら動くには、そちらの方が合理的であるということではしかないのだろう。角に砲身が取り付けられた様は子供が思い付きで絵に描いたような滑稽さだ。

周囲にもモーター音の他に、何かが高速で振動するような音があちらこちらで鳴り響く。そして、気付けば彼女の周りには同じような昆虫をモデルにした兵器が背後はもちろん、壁面や建物の屋上など四方八方から各自の兵器を彼女に向かって、照準を合わせていた。

口から諦めとも取れる力の無い声が溢れる。

「まさか、こんなふざけた兵器に殺されるなんてね。これも私に対する当て付けなのかもしれないけど」

彼女は人の心を操作する能力者であり、直接的な戦闘力は持っていない。そのため、これほどまでの過剰な火力を搭載した兵器を用いる必要性はないのだ。

人の想いや感情を操作し自らの利益に換えてきた彼女を、人ではない姿をした兵器で惨殺する。これこそが敵の狙いなのだろう。ある

いは、彼女の能力を味わい人間関係の脆弱さを知ったため、人型から離れた兵器を選ぶようになったのかもしれない。

周囲の兵器も目の前の兵器同様に、モデルとなった昆虫の鋏はさみや鎌の
ような部分から、それぞれの兵器を取り出す。目の前の兵器からもわ
かる通り、襲撃者は過剰戦力で確実に彼女をここで殺す気らしい。

「(随分と評価されているようだけど……そこまで大した人間でもな
いんだけどね本当は)」

人の心が操り測ることができる彼女に、本当の意味で大切と呼べる
存在は姉妹しかいなかった。血で繋がっているということが他人の
好感度とは違い、深い繋がりを感じさせていたからだ。

しかし、結局はこうして一人となった。

誰も彼も心の距離が操れる事実から、本当の意味で自分を出せる人
間はいなくなり、こうして死ぬときは誰にも看取られずに孤独に死
ぬ。

『心理定規』メジャーハートの能力が宿ったからこうなったのか、彼女の生まれ持っ
た性分がこの状況を生み出したのかかは、彼女自身にもわからない。

ただ一つわかっていることがあるとするなら、

「本当に大切だと思える誰かに巡り会いたかったわ」

そんな心理定規メジャーハートらしくない夢見がちな言葉を呟くと同時に、彼女は
機械の兵器が生み出す殺戮の猛威に呑み込まれた。

「めんどくせえな」

しかし、その言葉と共に彼女に迫っていた攻撃の一切が、まとめて
吹き飛ばされる。

「……………え？」

死を覚悟していた彼女はその光景に、ただただ呆然とすることと

なった。一秒前まで確実に自分は死ぬはずだったはずにもかかわらず、それが一瞬で覆されればこうなるのは必然だった。

「な……にが………？」

状況を把握するために視線を動かせば、彼はそこにいた。

茶髪の髪とホストのようなスーツ。しかし、そんな髪色や服装とはかけ離れたような物が彼の背中にはあった。

純白の翼。

三対の翼がその背中から生えていたのだ。その現実味の無い光景と自らの置かれた状況に夢か何かだと錯覚しそうになる。

しかし、ヒュンヒュンと回転しながら落ちて地面に突き刺さる、鋏はさみ型の高周波ブレードの振動が、これが現実であることを如実に語っていた。

そんな彼は身体を動かさずに首だけを捻り、こちらに視線を向ける。すると、彼は彼女を見て目を見開いた。

「まさかお前、心理定規か？」

「私を知っているの？」

「……ああ、まあな。会いたかったかどうかでいえば微妙だが」

自らの能力を知っていれば、そう認識するのも仕方ないと彼女は思う。好感度を能力で自由気ままに操るなど、外道と呼ばれても仕方ないのだから。

「よりもよって注意していた奴の一人に会っちゃまうとはな。『スクール』の面子と関わる気は今回はねえってのに……」

「？……何か言った？」

「なんでもねえよ」

そう言うのと彼は話を切り上げた。歓楽街にいそうな見た目をしてしたが、その目からはギラつきは感じられない。純白の翼といいどこまでもミスマツチな少年だ。

すると、そんな彼に突然声がかけられる。

『……何故私の邪魔をする？学園都市第二位』

「ふん、俺のことは知っているみたいだな」

彼女に向かって砲撃をした昆虫型の兵器から声が投げ掛けられた。

おそらく、どこかに取り付けられたスピーカーから声を送っているだろう。

だが、彼女はそんなことよりも注視すべきことがあった。

「……………やっぱりあなた……………」

あの翼にあの火力をまとめて薙ぎ払う出力から、もしかしてとあたりをつけていたが、まさか本当に学園都市第二位本人だとは思っておらず、彼女は目を見開いて驚いた。

『貴様にそいつとの関係性は無いだろう。私は一からそいつに関する情報を調べあげて今回の計画を敢行したのだから間違いない。』

その貴様がどうしてそいつを助けようとする？それは無駄で無意味なことだ。他人のために労力を浪費するなどなんの価値もない。わざわざ貴様がそいつのために駆け付ける理由は無いだろう』

「……………」

メジャーハート心理定規はそれを否定できない。それは自らの思考回路も同じ様な結論を導きだしていたからだ。そして、何よりもこんなドライな思考をするような女を、誰かが能力関係無しに助けに来るとも考えられなかった。

「別にこいつを助けるために来たわけじゃねえ」

『ほう、では何故ここに現れた？表に用意した警備員アンチスキルの指示によって、ここは立ち入り禁止となっていたはずだ。ここに理由無く入ってくる理由が他にあると？』

目を点灯させて声を送ってくる兵器は事実しか言わない。危険区域だと言われた路地裏に、わざわざやってくる人間など野次馬以外にはまずいないだろう。

彼女は襲撃者と同じく彼の言動の不一致さに疑念を抱くが、次の彼の一言でそれは吹き飛んだ。

「この道が帰るのに手っ取り早かったからだ」

『は？』

「え？」

彼女とスピーカーカーの向こうの人間から疑問の声が漏れる。彼女に
関しては間抜けにも口を開けて固まってしまっていた。とはいえ、襲
撃者も同じ様な顔をしているだろう。

「本来ならとつくの前に帰っているはずだが、担任の教師がやたらと
課題出してきやがってな。速攻で解いたにも関わらずこの時間帯だ。
めんどくせえ……」

『な、何だと……？それでは何か？貴様はここを偶然通りすがっただ
けだとても……？』

「そういうことだ」

『ば、馬鹿な！ありえん!!表には警備員がいたはずだ！何故奴らの指
示に逆らう真似をする!?!』

「ハッ、馬鹿かお前？何でこの俺が良い子ちゃん共と同じことをしな
くちやいけねえんだ。危険区域？俺がいるところ以上に安全なこ
ろなんてそうそうねえんじゃねえの？」

——常識つてのは常識に縛られてる奴らのためにある。常識の外
にいる俺がそんなもんに従う理由は微塵もねえんだよカス」

その傲慢とも取れる振る舞いは、名実ともに強者である彼が言う
と純然たる事実となる。

スピーカーカーの向こうの相手は取り乱したように言葉を重ねた。

『ならば、どうしてそいつを守る!?!今の説明ではそいつに肩入れする
理由は何も無いはずだろう!?!貴様に私と敵対する理由でもあるとい
うのか!!』

「ああ、あるな」

『何……ッ!?!』

まさかの即答とその答えに、スピーカーカーの向こうの人物から驚愕の
声が発せられた。その様子から彼との因縁に全く心当たりがないの
だろう。

『い、一体何が……』

「お前の声が出ているスピーカーカーが搭載されているそのガラクタ」

『……は?』

「お前それが何なのか言ってみろ」

いきなりの問いに困惑する襲撃者。それもそのはずだ、話が全く違うものになったのだから。

『(この兵器は今回初めて使ったものだ。この兵器に奴が因縁を持つことは絶対にありえない。それにどうして……?)』

「おい、答えろよ。それは何だ?」

襲撃者からすれば何にそんな反応をしているかは全くわからない。だが、ここでさらに不信感を与えるのは愚策であり、会話をすること
で好転することもあると思えば話は話し出す。

『……これは昆虫をモデルにした兵器の試作段階のものだ。一番重量
戦車などでは移動するだけでは意味がないとし、より自由度を広げる
ため生き物の動きを見本にした。そして、数多くいる生き物の中
でも、胴体を細い足で動かしている昆虫に注目したのだ。そして、今こ
のスピーカーを取り付けているものがその中でも最高傑作の一つ。
角の砲身はもちろん羽根を広げれば飛翔することもでき、砲身を隠し
た胴体は鋼鉄の鎧そのもの。攻撃性能と防御性能の両方から鑑みて
も、やはり兵器運用するならばカブトムシをモデルにし』

「死ね」

そして、蹂躪が始まった。



「あのときはこんな関係性になるとは思ってもいなかったわ」

あのあと、周りの兵器を数秒で破壊した彼は私と共に、すぐさま襲
撃者を特定して叩きのめした。

あの自堕落超能力者とは、そんなとてもヒーロー、ヒロインなんて
言う素敵な出合いではなかったが、今考えればだからこそ良かったの
かもしれない。

「私を助けといて私の顔にも能力にも興味がない男なんて初めて会っ
たんだもの。興味が湧くのは当然よね?」

誰かのように心の距離を変えても、昆虫のように同じ動作をするのでもない。誰かのように愛憎が一緒になっっているわけでもない。

心の距離が近付けばそれ相応の反応が返ってくるにも関わらず、全ての人間と常に一定の距離を置いている、珍しい価値観の持ち主。承認欲求も愛着も持とうとしないそんな彼と関わっていく中で、だんだんと自分の中の認識が変わっていった。

言ってしまうえばそんなことでしかない。

超能力者^{レベル5}でありながら、どこか諦めたような投げやりな態度を見て興味が沸いた。どちらかといえば、暗部としての思考を持ちながら、表の世界に居続けるその不可解さに興味が沸いた。能力を使わずにその壁を崩せるのか好奇心と共に興味が沸いた。

自堕落でホストのような風貌でありながら、二人で歩いていると自分の歩幅を合わせたり、いつの間にか車道を彼が歩いていたりなど紳士的なところに興味が沸いた。孤高というよりもどちらかといえば孤独なようなあり方に興味が沸いた。

珍しいことなど無い。近くに居たことで相手の新しい一面を知っていたというだけの話だ。

だからこそ私は^{ゆずりは}杠林檎に、彼と二人で出掛けることを許している。「私もあの日々を邪魔されたくはなかったもの。なら、彼女に好きなようにさせるのは先輩として当然よね」

そう言っただけの紅茶に口を付ける。これは、彼女に彼を譲ったわけではない。どちらかといえば私自身のプライドなのだろう。正々堂々などに興味は無いがああ時間を否定することは、過去の自分を否定することと同時であり、今の気持ちの否定であったのだから。

カップに注がれた紅茶には彼女の笑みが映っていた。

すると、玄関から二人の声が聞こえてくる。どうやら帰ってきたらしい。彼女はカップをソーサーに置き席を立てて出迎えに行く。

「(少しは先輩として相応しい振る舞いをしなくちゃね?)」

大人の余裕を併せ持ったうら若い可憐な少女は、微笑みを浮かべて二人を出迎えたのだった。

「近くのスーパーなら15分足らずで帰って来れると思うんだけど、
どうして30分弱も掛かるのかしら？もしかして、彼女に何か買って
あげたとか？ふふっ、もしかして今晚の夕食は抜きがお望み？」
「……何でそんなにキレてんの？」

9話 新歓コンパとは

遡ること二日前。

彼らはよく眠る^{ゆずりは}杠がベッドで眠ったあとに、机で他愛ない話をしていた。それは、お互いの近況であったり、最近の学園都市の変化や趣味などだ。

そんな会話をしていると、思い付いたように少女が一つ提案をした。

「ねえ、そう言えばまだ彼女の歓迎会してなかったわよね。やらないの?」

「あん? 歓迎会?」

予想外のことを言われ聞き返す垣根。それに頷いた彼女は続けて話し出す。

「ほら、彼女。まだ幼いからそういうことした方が喜ぶんじゃないかって思うんだけど」

新しくこのメンバーの一員となった^{ゆずりは}杠 林檎に対し、歓迎会をするという心暖かい提案だった。『暗闇の五月計画』の被験者だった彼女は、歓迎会のような迎え入れられる経験は一度もない。そんな彼女が三人からそれを受ければ、喜ぶだろうということは簡単に予測することがができる。

この言葉は彼女が^{ゆずりは}杠を思いやる純粋な優しさ……だけではもちろん無い。

これは彼に対する彼女のアピールなのである。

彼女の方向性としては家庭的な一面を見せ付け、大人びた気配りと包容力を見せ付けることにある。そして、彼の表での生活を調べ上げ、彼に特定の女の影が無いことは既に彼女は特定していた。

つまり、現時点では自分自身が誰よりも優位に立っていることを、彼女はそのデータと彼の動向から確信していた。

しかし、それに甘んじていては彼が新しい女を引っ掛けに行ってしまうことが、あり得ることを彼女は懸念する。

そのためのアピール。

ただ三歩後ろを歩くだけではなく、彼の不足。あるいは、鈍感なところをカバーできる女になること。そうすれば、他の女と話しても物足りなくなるのは自明の理。

女の一面と彼の人間性の理解者となること。これが彼女の推し進める計画だった。

「良い案だと思えますよ。自分は賛成です垣根さんは？」

「いいんじゃないねえの？ここでいいならわざわざ場所を押さえる手間も必要もねえし」

「じゃあ、決まりね」

パパッと手短に決める心理定規^{メジャーハート}。その決断力と行動力は垣根からしても流石の一言だ。まさに、彼女の術中である。

「でも、俺の知っている歓迎会とは違うものになりそうっすね」

「あら、どういう意味かしら？」

「自分の知っている歓迎会って、店借りて適当に摘まめるものとドリンク用意するやつしか知らないんすよ」

「ああん？別にそれでいいだろ」

垣根は誉望^{よぼう}が言い出したことに疑問の声を上げた。それに彼は簡潔に答える。

「いや、それだといつものお食と同じっていうか、品物のグレードが下がってるんで大したインパクトは無いですし、それこそいつもの食卓の方が^{ゆずりは}喜ぶ結果になるんじゃないっすかね」

「なるほど、確かにそうね。皆で食卓を囲んで食べるのはいつもの日常でしかないから、それで歓迎会というのも何か違うかもしれないわ」

「インパクトなんざいらねえだろ。歓迎会って銘打って適当に飲み食いして騒げば済む話だろうが」

「でも、彼女『暗闇の五月計画』の被験者だったんでしよう？こういうことされるのも初めてだろうし、気を使うなんてことも知らないから、そこら辺の事情は容赦無くズバズバ言っちゃおうよ？」

「あー、それは想像できるっすね」

^{ゆずりは} 杠は社会とは断絶された実験施設にずっと居たため、社交辞令のよ

うな対応をすることができず、年相応に思ったことや感じたことを言ってしまう傾向がある。そんな彼女に「用意してもらったんだからそれで満足しろ」とは、（一名を除いて）とても言えない彼らだった。「でも、それじゃあどうします？一般的なやつじゃウケが悪いのは目に見えてますよ。」

「そうね。なら、飲み食いをするということは変えずに、出される品物を変えるというのはどうかしら？」

「品物っていうとあいつが喜びそうな物か？あいつの場合飯食わせとキヤ何でも満足するだろ」

「その中でも、適した料理というものがあるのよ。立食会では食べやすい料理ばかりで、スープ系の料理は基本的に無いでしょう？料理は味だけではなくて振る舞うときの状況も大事なのよ」

「出す料理のジャンルが一品一品めちやくちやなお前が言うのと、説得力ゼロだな」

軽口を叩き合いながらも彼女は企画に肉付けしていく。

「子供が好きそうな品物を多くするのはどうかしら？私って今まであな達の舌に合わせていたから、あの年代が好きそうな物って碌に作ってなかったし。あとは、飾り付けなんかも増やして誕生日会と同じくらいにすれば、それなりのものになるんじゃないかしら」

「それはいいかもしれないっすね。とはいえ、自分は誕生日会だとかそういうのしたことないんですけど、垣根さんはどうっすか？」

「あー、無い訳じゃないがめんどくせえ記憶しかねえな」

「？何かあったの？」

「他の奴の誕生日会だったのに、クラスの女共が群がって来てな。邪険に扱えば扱うで余計に喜ぶ始末だ。そのときは男女半々だったはずなんだが、女子としかしゃべった記憶しかねえ」

「ふーん、大変だったのね」

「そのときに、二次会だか俺を連れ出そうとしたり、ふざけたノリ作ってキスしようとしてきた女もいやがったな」

「……………へえ」

「ひいつ!？」

垣根は前を向いていたため気付かなかったが、彼女と対角線となる席に座っていた誉望は、その瞳に映る剣呑さを直視することとなった。

誉望は暗部に身を置いており、様々な悪意をその身に直接浴びている。その誉望があらかじめ気構えをして無かったとはいえ、こうもあからさまに震えがったことから、どれ程凄まじいプレッシャーだったのかを察することができらるだろう。

「それでしたの？キス」

「そんな馬鹿な女に触れさせるほど俺は安くねえよ。適当に流して帰った」

「もしかしてヘタレた？」

「バーカ、単純にボーダーラインに達してなかっただけだ。あの程度じゃ俺には釣り合わねえ」

垣根はそう言って紅茶に口を付ける。彼にとって本当に眼中に入ってもいない相手だったのだろう。そして、その答えを聞いた心理定規の反応も分かりやすいものだった。

「(はあ……、その顔を垣根さんに見せれば進展の一つや二つはすると思っうんですがね)」

いつもの飄々とした態度とは違い、安堵し穏やかな笑顔を浮かべる少女を見ながら、誉望は内心でそんなことを思った。

……まあ、弱味を握られているため、思うだけで迂闊なことは言えないのであるが。

そんなわけで決定した^{ゆずりは}杠 林檎歓迎会。主催は心理定規が取り仕切り、残る男衆がそのサポートという手筈だ。

^{ゆずりは}杠は眠ったとき以外は垣根の側から離れないため、基本的に暗部が無いときは二人が準備を進めて、垣根が^{ゆずりは}杠を部屋から離れさせる役目になった。



そうして迎えた当日、歓迎会の日がやって来た。

一旦、垣根が^{ゆずりは}杠と共に外出し、二人の準備が終わり次第に再び戻る段取りだ。

「……あれ？暗い？」

「あいつら用事あるって言ってたからな。もう、帰ったんだろ」

「残念。^{メジャーハート}心理定規の料理楽しみにしてたのに」

夕飯のためにお腹を空かせて帰ってきた^{ゆずりは}杠は、彼女のご飯が食べれなくてがっかりしていた。彼女も垣根達同様に数日で胃袋をがっちりと掴まれていたのだ。

とはいえ、たまに作り置きをしてくれる^{メジャーハート}心理定規のことを思い出して、^{ゆずりは}杠リビングへと駆けた。

それを見て垣根は懐に入れているクラツカーを取り出す。

そう、この瞬間まで全て彼らの計画通り。

全ての段取りを^{ゆずりは}杠に察知されないように完璧に遂行した彼らは、無事にその時を迎える。

ガチャツとドアノブを捻る音と共に、小さな身体が部屋の中へと入った。そして、何故か灯りが付けられていない部屋に、パツと突如光が灯る。

「わっ！」

そして、スパパパンツ!!と、鳴り響くクラツカーに驚き、^{ゆずりは}杠は目を真ん丸にする。ヒラヒラと舞う紙吹雪を見ながら呆然とする彼女を見て、三人からそれぞれの笑みが溢れた。

それは心からの笑みであったり、苦笑であったり、不敵な笑みであったりと様々なものであったが、そこに嫌悪のものは何一つ無い。混乱する彼女にその三人からとある言葉が送られた。

「^{ゆずりは}杠 林檎、仲間入りおめでとう」

その言葉に「え？」と固まる^{ゆずりは}杠であったが、リビングの壁に付けられた布を書かれた物を見て、その文字を言葉にする。

「歓迎会……?」

眩く^{ゆずりは}杠の後ろから垣根が言葉を発する。

「お前がここにきて1週間は経ったからな。それで、お前の歓迎会を聞くかって話になったんだよ。まあ、主催はその心理^{メジャーハート}定規で、俺と^{よぼう}誉望はそのサポート程度しかしてねえけどな」

「ふふっ、驚いてくれたようで何よりだわ。でも、これだけじゃないわよ?」

今回の主催者である心理^{メジャーハート}定規に背中を押され、テーブルの置かれたリビングに移動すると、彼女の瞳が一際輝くものがそこにはあった。「すごいー・おいしそうー!すごいー!」

そこには、豪勢な料理がところ狭しと並んでいた。この光景を見れば一大イベントであることは一目瞭然だ。そして、その料理を作った料理人はもちろんこの人。

「そんなに喜んでくれて嬉しいわ。腕によりをかけて作ったから味わって食べてね」

艶やかな声音に暖かさを乗せながら、心理^{メジャーハート}定規は杠に料理を勧め^{ゆずりは}る。

「にしても、歓迎会に七面鳥やホールのケーキとか、いくらなんでも雑食すぎやしないか? 適当にピザとかで良かったんじゃないか?」

「私も最初は子供の好きそうな料理にしようと思ったんだけど、彼女はそもそも歓迎会自体をイメージでしかないだろうから、こういう場で出されるような物を出して上げた方が喜ぶんじゃないかと思っ^てね。思い付く限りの料理を作ってみたわ。

あと悪いけどピザってまだ上手く作れないのよ。及第点は取れてるんだけど、やっぱり専用の釜じゃないと上手く焼けないのかしら?」

「いや、何で自前前提なんだよ。宅配でいいだろ宅配で。っーか、ピザまで作れるようになったのかよ。どこまで行く気だお前」

「違うわ及第点よ。まだ披露できるまでになっ^ていないから、出来ないと同じよ」

「でも、心理^{メジャーハート}定規さんの及第点って相当高いっスよね。それで下手な

料理店を軽く凌駕してますし、ぶつちやけ最近は外食のレストランで物足りなくなってますよ俺」

見るからにそういったものは外食で済ませそうな少女は、同年代ではとても張り合うことが出来ないほどに、女子力が天元突破していた。

色々突破しているせいで、本職ですら冷や汗を掻くほどの傑物になってるのは、純粋な彼女の才覚によるものか、はたまた少年による想いの強さからか、それともその両方か。

「よくもまあ、自分から疲れることをしようと思うもんだ。いくら家事を極めようが暗部の仕事で使えるもんでもねえだろうに」

「そうでもないわよ？ターゲットが日常生活で残した手がかりとなる物も、以前とは段違いに分かるようになったし、家政婦とかで潜入する任務とかもそつなくこなすことができるから、どつちかっていうとプラスになっているわよ」

暗部での仕事は知っているものの、『スクール』以外での彼女の活動を特に把握していなかった垣根は、「ふーん、そういうものか」と、素直に受け取る。

実際には住み込みなどすれば、ここに多く立ち寄れることが少なくなってしまうため、そう言った依頼は受けてはいないのが実情である。

では、何故そんなことを言ったのか？単純な話だが先ほどの内容はあらかじめ用意していたカバーストーリーなのだ。というのも、少女が花嫁修業をしていると言っても訝しむだけだろうし、最悪別に惚れた男が居るだのこうだのになったら、面倒にも程がある。

そのことから、暗部の仕事との関連性を示唆しつつ、話をでっち上げた方が角が立たず穏便に技術を向上させることができる。

「胃袋を掴むことは基本中の基本。味の好みはもちろん、純粋な技術や知識の向上も必要なことだもの。他の男ならいざ知らず、彼の場合だと分りやすい努力アピールは逆効果になりかねない。」

実際の実力を付けることはもちろんだけど、努力の研鑽は言葉の端々から滲み出るぐらいじゃないとね」

その技術は想いの強さで語れるレベルを逸脱しているのだが、そのことに不満を持つ者は当然おらず、彼女もより高みに昇ろうと努力を続けたため、誰も彼女の行動に疑問を抱くことはなかった。

常に余裕を持ち、飄々と立ち振る舞う少女が恋慕の情に振り回され、努力の鬼と成り果てているなど誰も察することなどできなかつたのだ。

能力開発のときですら、ついで必死さを抱かなかつた彼女が、男と付き合ってもいない段階で、死ぬ気で花嫁修業をしていたなど誰が想像できるだろうか。

なまじ表ではその努力を見せないことが、周囲を趣味の範囲内だと勘違いさせた。

こうした経緯の基、女子力MAXの怪物が生み出されたのである。そのことを一番関係の薄い枉ゆずりはに察せられるわけもなく、目についた料理をひたすらに口へ掻き込む小動物と化していた。

「垣根！垣根！これすごいおいしい！私これ食べたことない！」
「お前の場合ほとんどのもんを食ったことねえだろうが。食い意地張って喉詰まらすなんて馬鹿な真似はするなよ」

「それじゃあ、私達も食べましょうか。量は彼女だけじゃ食べきれないほどに用意したことだしね」

面子が面子のため賑やかに騒ぎ出すということはなかったが、四人仲良く食事をするその光景は心暖まるものだった。それこそ、その半分が暗部所属の者だと、勘繰る者はまずいないと断言できるほどに。

年相応に楽しむ彼女達の緩やかな時間は、彼らの穏やかな会話と共に学園都市の街並みの一つとして、確かにそこにあつたのだ。彼らは思い出に残る大切なこの1日を忘れないことはないだろう。

そんな彼らの時間を邪魔しないかのように、ゆっくりと日は落ちていったのだった。

しかし、そんな彼らの空間に割り込むかのように、玄関からチャイムが鳴る音が響いた。

10話 狛虎ちゃんには友達はいない

初めまして私の名前は弓箭狛虎です。

お嬢様学校に通うツースイドアップの今どきな女子高生です。そんな可愛くてリア充な私ですが、実は暗部に所属している暗殺のプロであつたりします。

そんな複数の顔を持つミステリアスガールなこと私ですが、第二のホームとも呼ぶことができる場所があります。それがあの学園都市第二位が暮らす住居です！

そこには夜の住人であることを表すように、家主の垣根さんはホストのような格好ですし、その人に通い妻をしている心理定規さんはホステスのような格好をしています。

イケイケと言うか、なんかちよつと危ない感じがまさにリア充ですよねっ！そして、逆説的に彼らと一緒に居る私はリア充と言うことになるわけです。

え？ギョロ目シャンプーハット？

……あー、あの人は悪………い人ではあるんですけど、まあ話してて嫌な人ではありませんよ？落ち込んだ時とかご飯誘ってくれませし。

でも、純粹にタイプじゃないっていうかそういう対象じゃないんですよねー。瞳孔常に開いてますし。よくドライアイにならないものです。

関係ありませんが一つ言えることは、あの人はリア充ではありません。いやー本当に悲しい話です。悪気は無いんですが誉望さんには、私達のイケイケな場面を何度も見せ付けてしまっていました反省反省。

陽キャの私達に疎外感を抱いてしまうのは仕方無いことでしょう。今度からは私が誉望さんをご飯に誘うことが多くなってしまうそうです。暗部での生き方を教えてくれた人でもありますし、そのくらいのことには笑顔でしてあげましょう♪

「おっと、ここに来るのも久し振りですね」

そんなことを考え歩けば目的地に着いていました。目の前にあるタワーマンションが学園都市第二位が暮らす住居です。お友達の家遊びに行くつてのもポイントが高くていいですよねっ。

備え付けられているエレベーターに乗り、垣根さんの在宅している階層のボタンを押してエレベーターが上がっていきます。

「ここ最近はずかしかったですからねー。表と裏の両立は大変です」

お嬢様学校とはいえ課題は当然出ています。いくら暗部にいるとはいえ、表の生活を疎かにするほど私は落ちぶれてはいません。

うん？一緒に勉強会をする友達？

ははっ、無知であることは罪とはよく言ったものですねえ。お嬢様というのとはそんなワーキヤーするようなことはしません。みんな個々人でやるものなんです。

なぜなら、私は一度も勉強会に誘われたことがありませんからね。つまり、そんな集まりは無いということですよ。

ふふんっ、また一つ賢くなれましたねっ♪

そんな訳で勉強はもちろん、暗部での依頼をこなす毎日をしていると、ここに訪れることが当然のように少なくなってしまう。最近、依頼の量が増えてきてるんですよ。私の腕が買われているということなので、いいことではあるんですけど。

そのため、ここに訪れるのも2週間ぶりとなります。もしかしたら、垣根さんと心理定規メジャーさんも寂しがっているかもしれない。

誉望よぼうさんは仕事でたまに一緒になるから、そんなことにはならないでしょうけど。

すると、チンツと音が鳴り目的の階層に着きました。つまり、2週間前まで通い続けた私のもう一つの居場所がもうすぐですね。

軽快な足取りで進みその一室の前まで来ると、チャイムを押します。ふふっ、このチャイムを押すだけで1時間以上時間を使っていた時が懐かしいですね。

あのころは緊張していたのでそうなるもの仕方ありませんでした。初めて友達の家に行くのです。誰でも経験することですね。

そうして待っているとガチャリと鍵が外されました。いつものパ

ターンですと心理定規メジャーさんでしょう。

その扉が開けられるとそこには誰もいませんでした。

いえ、少し目線を下げられるとそこに、小さな頭があることが分かります。ですが、私はその人物に見覚えがありません。

しかも、何故か頭にサンタクロースの帽子を被り、紙で輪を作ったものを繋ぎ合わせ、ハワイのフラダンスレイのようにしている子供など、人生で見掛けたことは一度もないのだ。

そんなぶっ飛んだアクセサリーと、キャミソールにジャージという追加コンボで混乱してしまい、言葉も出ない私に彼女は眠た気な瞳と小首を傾げて尋ねてきた。

「……誰？」

「あなたが誰ですかッ!？」



「(これは悪夢なのでしょうか。いえ、間違いなくこれは悪夢なのでしよう。こんな悲劇がこの世に存在しているだなんて、私は今まで想像することもできませんでした)」

呆然とした様子で彼女は呟いた

「……な、なんですかこれ……?」

2週間ぶりに来てみると、そこは私の知っている場所ではありませんでした。きらびやかな飾り付けに見たこともないような豪華な料理。そして、誕生日席に座っていただろう見たことも無い少女。ここは私の知っている世界ではありませんでした。

「そーいやお前はまだ会ったことはなかったか。こいつはゆずりは杠林檎。こここの集まりの新しいメンバーだ」

ゆずりは杠林檎。よろしく」

眠たげな顔で言われた自己紹介に、私は碌ろくに返事をすることもでき

なかった。私は現状を把握したいのか、それとも単純にその事実が受け止められないのか、それすら分からずに先程から抱いていたその疑問を彼女に尋ねた。

「そ、その季節外れの帽子や首飾りはなんですか……？」

「こいつが喜びそうな物なんてわからなかったからな。心理定規メジャーが作るもんから想像して、適当に買い漁っておいたんだよ」

訳がわからない。彼は何を言っているのだろうか？

だが、言っている言葉は分からなくても一つだけ分かったことがある。——つまりここは、私の知る常識は一切通用しないことだ。

そして、上げるべき事柄を上げてしまった私は、ずっと目を逸らしていたその物に目を向けなくてはならなくなった。その受け入れがたいその文字。その言葉を震えながらも声に出して読み上げる。

「かんげい……かい……？」

その三文字に私は見覚えがなかった。そう、私は一度も彼らに歓迎会などされていなかったからだ。つまり、これは逆説的にこういうことになる。

「(私って今まで歓迎されてなかった……？今まで感じていたものって私の自惚れ?)」

その事実気付いたときに全身が燃え上がるような羞恥と、背骨に氷柱が突き刺さるような寒気が同時に襲った。

「(嘘嘘嘘嘘嘘ッ!?私もしかしてずっとボツチだった!?いやだボツチは恥ずかしい!ボツチになりたくない!)」

その事実思い至り、半狂乱に陥る弓箭ゆみやら獵虎らっこ。

——だが、そもそも今までそう言った行事自体が、存在しなかっただけであるのが実情である。

しかし、それを後ろめたいと思う者も一定数いるようだ。分かりやすく言うと先程から会話に参加せずに、目を逸らしている二人であ

る。

「マジかよ……こいつ、今回のターゲットが尻尾なかなか掴ませないから、あと数週間はかかる予定とか言ってたくせに、とんでもないタイミングで戻って来やがった。」

どうせならあの事件のことにこれで区切りを付けてから、会わせようと思ってたけど、完全に裏目に出たな……」

誉望よぼうは彼女とそれなりの付き合いのため、歓迎会のことを聞けばどうなるかはだいたい分かっていた。それで落ち込む程度ならばいいが、それで任務に気持ちが入らずに死ぬなんていう可能性も無いとは言いい切れない。

そして、歓迎会の日にちを伸ばしてもらったのだとしても、今回の騒動とは完全に蚊帳の外であったため、彼女の性格からして居ずらいことこの上ないとも察した。

ならば、さっさとこのメンバーで終わらせてしまい、後日文句を言ってきたり、へこんでいたら飯に誘おうと計画していたのだ。まさか、こんな最悪過ぎるタイミングに現れるとは予想だにしていなかったのである。

「申し訳ないけど記憶から彼女のことを飛んでいたわ。ちよつとばかり四人でいることに慣れすぎたわね。あの子のことに意識を向けすぎたのも要因かしら」

彼女がどの程度の脅威となる存在なのかを、見定める必要があったため残念ながら獺虎らっこのことは頭から抜けていた。

「まあ、私は彼と二人で歓迎会をしたことあるけど」
そしてこの女。この状況を完璧に把握しながら、弓箭獺虎ゆみやらっこ相手にマウントを取っていた。

実は新居に引っ越す前に軽い慰労会として、彼女と垣根は二人でそれなりにいいレストランで食事をしている。というのも、新居の手配や日頃の食事の感謝を、彼女がねだったからというのが理由である。

夜の学園都市を見下ろしながらの二人のディナーは、彼女にとって大切な思い出の一つだ。

——今それを思い出すのはどうかと思うが。

そして、自らの未来を知り、前回よりも適当さが増した垣根はそこから辺の機微が若干疎くなっていた。要するに弓箭獵虎ゆみやらっこの今の精神状態を全く把握していなかった。

「つーか、お前もタイミング悪いな。いや良いのか？ そのおかげで俺達みたいな手間を掛けさせず済んだんだからな」

「……ッ！」

垣根としては別に今回与えられた役目自体に不満はない。他の二人よりも適した人選だっただろうと認識している。だが、客観的に見たとき昼間から少女を連れ回す高校生でしかなかったし、何よりもまるでどこかの第一位のような組み合わせだということに気づき、人知れず苛立っていたのだ。

彼としては本心以外の何物でも無いのだが、それは受け取り手によって大きく印象を変える。

とどのつまり、自慢にしか聞こえないのだ。

『いやー、歓迎会とか手間とか費用とかかかって超憂鬱だわー。でも、仲間のためならそれも仕方ないかな？ 仲間のために手間暇掛けない俺らマジでズツ友じゃね？』

弓箭獵虎ゆみやらっこの耳にはこうにしか聞こえないのであった。そんな彼女の取る行動もある意味分かりきっていた。

「うわああああああん!!馬鹿ああああ!!」

大号泣をしながら扉を思い切り開けて逃走したのだった。それを見ながら最近見慣れるようになったコンビは揃って首を傾げる。

「?..どうしたの?..」

「さあ、俺が知るか」

誉望よぼうは彼女の地雷の上を無自覚で踏み抜いた彼に言葉が出なかった。

11話 ていとくんは今日も気だるげ

これは遡ること数週間前のこと。とある病院の手術室からその男は現れた。

「手術は無事終わったね？」

そう言いながらマスクを外したその医者は、垣根に話し掛けてくる。

「流石の腕だな。余りにも速すぎてミスを疑っちまいそうだ」

「僕に限って患者を苦しめる手術をするだけでも？ここは僕の戦場だ。その場でそんな醜態は晒さないとも。」

それに、君も自分の目で僕の手術を見ていたはずだけどね？」

ここに来たのは^{ゆずりは}杠に治療をするためだ。未元物質^{ダイクマター}による臓器機能の復元は問題なく稼働しているが、どれだけ身体に負担が掛からないよう変化させても、根本は超能力という異物なのは変わり無い。

治るのならば確立した医療技術に頼る方が正常だろう。と、なれば誰を外科医とするか。

半端な腕の医者は論外として、学園都市の上層部の息のかかった医者では、^{ゆずりは}杠の手術をしながら新しく何を埋め込む可能性がある。

「(そこで俺が選んだのがこのカエル顔をしている医者だ。第一候補^{メインプラン}である一方通行の手術を任せられかつ、脳に損傷を負った一方通行の演算機能^{よみがえ}を蘇らせた男。」

その後、一方通行^{アクセラレータ}からの制裁がなかったことから、その時に何かを埋め込んだってことも無いだろう)」

とはいえ、推測でしかなかったためにこうして手術には立ち会ったが、やはり不審な点は見付けられなかった。つまり、無事に手術は成功^{ゆずりは}し杠の身体から異物は除去されたということだ。

「僕としては君の能力が彼女の中に入っていたことから、その副作用も考えてちゃんと君の能力である未元物質^{ダイクマター}を精査したいとこのんだけどね？」

「ハンツ、どんなに腕があろうがただの町医者風情が、この俺の能力のデータを取れるだなんて思ってんじゃねえよ。その技術に敬意を評

して今回は不問にしてやるが、その分不相応な望みはさつさと捨てることだな」

「……やれやれ、仕方ないね」

ため息を吐いた彼を無視するかのようになり、垣根は背を向けて歩いていく。未元物質は変幻自在に変化する能力だ。垣根自身が任意指向性を与えなければ、望んだ出力を捻出することはできない。

そんなカエル顔の医者から離れながら周りを見れば、なおさら不信感が湧いてくる。

「（ゆずりは 枙を助けようが、アレイスターの野郎とあの医者が繋がってないとは思えねえ。一方通行の治療もそうだが、ここにある機材はどれもこれも一級品。

……いや、中にはどんな技術が使われているか分からねえもんが幾つかある。学園都市第二位にして、『スクール』のリーダーであつた俺がだ。

俺の未元物質は自我の崩壊のリスクを無視すれば、学園都市第一位である一方通行をも打倒するポテンシャルを秘めているが、絶対無敵な能力な訳じゃない。

当時はもしもの時のために暗部に存在する医療についても、粗方頭の中に意図通り詰め込んでいた。そんな暗部にどっぷり浸かつた俺が、一度も見ていない機材がある時点であの医者は普通じゃない。

あれがアレイスターの手によるものなのかどうかは知らないが、暗部の影がちらつくなら下手な情報は与えないに限る。これ以上面倒くせえことはゴメンだ」

そして、その三日後。

ゆずりは 枙 林檎は無事に退院したのだった。



彼は珍しく学園都市の街を一人で歩いていた。今日はちょうど家

に心理定規と弓箭^{メジャーハート}狩^{ゆみやらつこ}虎^こがおり、
杠^{ゆずりは}林檎と女三人で何やら話すよう
だ。

「(本来ならそんな事情なんて知ったことじゃねえがな。何てったつてあそこは俺の家だし)」

正論中の正論であり正義は誰の目から見ても彼にあるのだが、彼は今こうして太陽の下を歩いている。これは別に言いくるめられた訳でも、紳士として女性を優先したわけでもない。

前世では暗部として老若男女関係無く、必要とあれば消してきた。今さらそんなチャチなことに彼は頓着はしない。しかし、ならば何故家を空けたのか。それは彼が握る携帯電話にある。

「しばらく学校にはこの頃行つて無かつたな。面倒くせえことこの上ないがこれが普通つてやつか」

同級生の男からメールが幾つか来ていたのだ。特に親しくした覚えはない相手だが単位

学校に行く意味があるかと言えば全く無い、と彼は答えるだろう。学校生活など彼にとつては下らなく、表で何も知らず生活してるクラスメイトには関心を向ける気にもならない。

「(杠^{ゆずりは}とずつと行動してれば、当然俺の人質として狙われる。だが、俺だけじゃなく『元スクール』の奴等と交流があるなら、向けられる意識の分散ができる。)

他の奴等との出会いも多かれ少なかれこんな感じだからな。杠^{ゆずりは}だけ集中的に狙うつてこともないだろう。というか、俺を暗部に落とすだけなら、他のどつぷり暗部に浸かつている奴等を出汁に使った方が手っ取り早い)」

だからこそ、彼としては自分のことを放っておいて欲しいのだが、どいつもこいつもやたらとクセが強く、説得するのにも無駄なエネルギーを使うのは目に見えていた。

「(特に心理定規^{メジャーハート}の野郎だ。あいつ、俺が拒否しようがお構い無しに無理矢理押し掛けて来やがって。一度本気で殺意を向けたが暖簾に腕押し。しかし何だあの意味不明な肝の座り様は?)

そして、次に来やがった誉望^{よぼう}を、家から追い返そうとすりゃ『……

使えるかも』とかなんとか言ったあとに、急に誉望よぼうの肩を持ちやがって。

……まあ、あいつの言った通り誉望よぼうの索敵は、俺の未元物質ダークマターを使うコストを削減する上で使えるから、別に不便なことも無いがな」
やる気が起きない彼は、楽をできるならば楽をしたいという欲求に素直である。そのためならば、一線を越えることが無い限り別にどうこうするつもりは無い。

※ちなみに、弓箭ゆみやら狩虎は暗殺と追跡用の索敵しかできないため、しばらくの間は家の敷居を跨ぐことができなかつたという、経緯があつたとかかなかつたとか。

通学路を歩いていると朝の時間もあり、通行人が多く行き交つていた。文字通り学園都市であるため、学生が大勢居ることは当たり前なのだが、彼からすれば鬱陶しいだけであつた。

「(どいつもこいつも夢だの希望だのと、馬鹿みたいな面を晒しながら夢物語を吐きやがる。この街に来た時点で研究者共からすりやあ実験動物扱モルモットいだ。」

脳ミソを平気な顔で弄るような奴等が、整えた街や未来がイカレているくらいは、馬鹿でも推測するくらい分かるだろうが……。

この街に居るだけで危険がいっやって来てもおかしくねえつてのに、自分には悲劇なんて起こるはずないなんて、なんの確証もない楽観視で現実から目を背けていやがんだ」

暗部に居た彼からすれば表の世界は余りにも温すぎる。余りにも無防備に無警戒と見ているだけでイラついてくるのだ。

その矛先が本当に歩く人間に向いているのか、それともそんな環境を作り出しているこの街に向けているのかは、本人ですら分からない。

そんなことを考える彼の眉がピクリと動く。平穏な街並みから懐かしい匂いがしたからである。

「……チッ、めんどくせえ。どいつもこいつも学園都市第二位って言

う肩書きだけしか見えねえカスしかいねえのか」

そう言うのと彼は持っていた携帯をポケットに仕舞い、今まで歩いてきた進行方向から意図的に外れた。それは表の世界から隠れるようにも見えた。

しかし、それに気付く者は誰もいない。きつとそれこそが彼と表に居る人間との明確な違いなのだろう。

「暗部を匂わしているあの身のこなしや目線の向け方は、雑魚中の雑魚でしかねえ。

ハア……、随分と舐められたもんだ。暗部に堕ちないようにするとこんな馬鹿の相手もしなくちゃなんねえとはな。つーか、もしかして第三位もこんな雑魚に絡まれてるのか？」

同じ超能力者である中学生の少女に、彼は初めて親近感を覚えるが、表の世界で生きることが当たり前だと感じる、世間知らずのお嬢様だということ思い出し、そもそも在り方が全く違うのだからこういう手合いに出くわしたときの感想も、全く違うのだろうと思に至る。

「周りに合わせる事が当たり前っていう感性はよくわかんねえな」

彼からすれば『暗部に堕ちないようにするため』と『詰んでるから全てどうでもいい』、という前提条件がなければ歯向かう敵は軒並み捻り潰している。

とはいえ、格下を相手にして殺すことはごく稀だが、御坂美琴のように怪我とまらないよう気を付けながら、能力を使用するほど気にしてはいない。

こちらを害しに来たのだからそれくらいは甘んじて受けろ、というのが彼の考えてある。

「まあ、ストレス発散ぐらいには利用できるか。いや、それさえもできなかつたら流石に半殺しにしてもいいな」

裏路地に入りながらそんなことを考える彼に不安や焦りなど一つもない。これは彼が想定していた事柄の一つでしかないからだ。暗部のやり方は当然熟知しており、そこに属している人間の思考などわ

わざわざ推測する必要も無い。

彼にあるのはわざわざ学校に向かおうと出歩いたにもかかわらず、こうして余計な手間に時間を割くことになった人物に対してのイラつきだけだ。

だからこそ、気付くのが遅れた。

「……………待てよ。この裏道はおかしくねえか？」

それは暗部組織『スクール』のリーダーを務めた男の経験則から来る直感だった。だが、その直感を裏付ける要素がどんどん積み重なっていく。

「目線の動きや身のこなしは三下もいいところだ。この場所をコイツが利用するのは身の丈に合わねえ。ここは暗部の人間だからこそ分かるが、造りが作為的に作られてやがる。

路地裏にあるマンホールの数からして普通の倍はあることから、あの中に本来とは別の用途で活用するための何か、それこそ足をつかないようにするための逃走経路なんかがあるはずだ。……………だとすると、このあからさまにある窓の奥にも何か仕込んでやがるな？」

……………チツ、つまりはまんまと誘い込まれたってことか」

次の曲がり角で追いつくところまで接近していた垣根は、急に動きを止めて周囲の気配を探る。そして、その結果はすぐに弾き出された。

「……………おい、これはなんの真似だ？」

「おやおや、見ない間に随分と怒りっぽくなっちゃったようで。こんなものちよつとしたお茶目の範囲内でしょう？」

垣根の背後から女性の声が聞こえてくる。それは、あの垣根帝督が背後を取られたということに他ならない。つまり、当然の話だが暗部の下っ端などではない、かなりの実力者であることの証明だった。

そして、垣根はそれが誰なのか知っている。それこそ、今の垣根を形成した要因の一人と言っても過言ではない人物だからだ。

垣根に近付いてくるパジャマ姿で車椅子椅子に座るその人物は、前世で垣根の未元物質^{ダイクマター}を機械工学の分野で利用した科学の天才の一人。暗闇のように影が差したその目を歪ませ、彼女はまるで食事に誘う

ような軽い調子で垣根に言葉を投げ掛けた。

「それとも、昔のように私に『諦め』させて欲しかったりするのでしょうか？それはそれで、胸が高鳴りますね！。

私としても元生徒のあなたがどこまで成長したのか気になりますので吝かではありませんよ？」

科学を悪用しようとする異分子であり人格破綻者の血統、『木原一族』。その一人である木原病理が、彼の前に再び『先生』として現れた。